

Arcserve® Backup for Linux

Agent for Oracle Guide

r17

arcserve®

組み込みのヘルプシステムおよび電子的に配布される資料も含めたこのドキュメント（以下「本書」）はお客様への情報提供のみを目的としたもので、Arcserveにより随時、変更または撤回されることがあります。

Arcserveの事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複製、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。本書はArcserveが知的財産権を有する機密情報であり、ユーザは(i)本書に関連するArcserveソフトウェアの使用について、Arcserveとユーザとの間で別途締結される契約により許可された以外の目的、または(ii)ユーザとArcserveとの間で別途締結された守秘義務により許可された以外の目的で本書を開示したり、本書を使用することはできません。

上記にかかわらず、本書で取り上げているソフトウェア製品（複数の場合あり）のライセンスを受けたユーザは、そのソフトウェアに関して社内で使用する場合に限り本書の合理的な範囲内の部数のコピーを作成できます。ただしArcserveのすべての著作権表示およびその説明を各コピーに添付することを条件とします。

本書を印刷するかまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザはArcserveに本書の全部または一部を複製したコピーをArcserveに返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、ARCserveは本書を現状有姿のまま提供し、商品性、お客様の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本システムの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の損失等、いかなる損害（直接損害か間接損害かを問いません）が発生しても、ARCserveはお客様または第三者に対し責任を負いません。ARCserveがかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本書に記載されたソフトウェア製品は、該当するライセンス契約書に従い使用されるものであり、当該ライセンス契約書はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者はArcserveです。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212, 52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、及び、DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

© 2016 Arcserve（その関連会社および子会社を含む）。All rights reserved. サードパーティの商標または著作権は各所有者の財産です。

Arcserve 製品リファレンス

このマニュアルが参照している Arcserve 製品は以下のとおりです。

- Arcserve® Backup
- Arcserve® Unified Data Protection
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Windows
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Linux
- Arcserve® Replication/High Availability

Arcserve へのお問い合わせ

Arcserve サポート チームは、技術的な問題の解決に役立つ豊富なリソースを提供します。重要な製品情報に簡単にアクセスできます。

<https://www.arcserve.com/support>

Arcserve サポートの利点

- Arcserve サポートの専門家が社内で共有している情報ライブラリと同じものに直接アクセスできます。このサイトから、弊社のナレッジベース (KB) ドキュメントにアクセスできます。ここから、重要な問題やよくあるトラブルについて、製品関連 KB 技術情報を簡単に検索し、実地試験済みのソリューションを見つけることができます。
- ライブチャットリンクを使用して、Arcserve サポート チームとすぐにリアルタイムで会話を始めることができます。ライブチャットでは、製品にアクセスしたまま、懸念事項や質問に対する回答を即座に得ることができます。
- Arcserve グローバルユーザコミュニティでは、質疑応答、ヒントの共有、ベストプラクティスに関する議論、他のユーザとの対話に参加できます。
- サポートチケットを開くことができます。オンラインでサポートチケットを開くと、質問の対象製品を専門とする担当者から直接、コールバックを受けられます。

また、使用している Arcserve 製品に適したその他の有用なリソースにアクセスできます。

目次

第 1 章: Agent for Oracle の概要	9
エージェントの特徴.....	10
エージェントの機能.....	11
データベース全体のバックアップ.....	11
第 2 章: エージェントのインストール	13
インストールの前提条件.....	13
RAC 環境のエージェント.....	14
エージェントのインストール.....	14
インストール後の作業の実施.....	15
ARCHIVELOG モードの確認.....	16
ARCHIVELOG モードでの実行.....	17
自動アーカイブ機能.....	17
ARCHIVELOG モードと NOARCHIVELOG モードの比較.....	20
エージェントの環境設定.....	21
RMAN カタログの作成.....	24
Recovery Manager に必要なインストール後タスク.....	26
SBT 2.0 インターフェース.....	26
SBT ライブラリでの sbt.cfg パラメータ ファイルの使用方法.....	27
SBT インターフェースでの libobk ライブラリ ファイルの使用方法.....	28
Oracle および CA の libobk ライブラリ ファイル.....	28
Oracle データベース ユーザを Arcserve Backup ユーザと同等の権限として追加.....	30
エージェントの削除.....	30
第 3 章: データのバックアップ	31
バックアップの基礎.....	31
バックアップ計画.....	31
Oracle Server の構成.....	33
Online Redo Log Files.....	33
複数のデータベース.....	34
バックアップ.....	35
Recovery Manager (RMAN).....	35
バックアップの方式.....	37

Oracle データベース オフラインのバックアップ	37
Oracle データベースのオンラインでのバックアップ	42
Multistreaming Backups	46
チャンネル (ストリーム) オプションの数を指定してバックアップ	47
エージェントでの RMAN スクリプトを使用したバックアップ	48
RMAN を使用した手動バックアップ	49
RMAN コマンドライン スクリプト	50
バックアップに関する制限事項	51

第 4 章: データのリストアおよびリカバリ 53

リストアおよびリカバリの基本	53
リストア	54
リストア方式	54
リストア マネージャ	55
リストア オプション	58
リストア ビュー	60
データベース オブジェクトのリストア	61
アーカイブ ログおよび制御ファイルのリストア	64
パラメータ ファイルのリストア	65
Point-in-Time のリストア	66
Recovery Manager (RMAN)、および別のサーバへのデータベースのリストア	67
データベースのリカバリ	72
リストア マネージャによるリカバリ	72
エージェントでリカバリできないファイル	74
リカバリ処理に関する Oracle の制限事項	74
手動リカバリ	74
オフラインフルバックアップからのリカバリ	76
リストアおよびリカバリに関する制限事項	77

付録 A: ディレクトリおよびファイルの検索 79

Agent Directory Locations	79
Agent File Locations	79
データ ディレクトリの下での Agent ファイル	80
Agent Files Under Logs Directory	80

付録 B: トラブルシューティング 81

エイリアス名の割り当て	81
RMAN スクリプトによる複数のチャンネルへのバックアップが失敗する	82

ヒント.....	82
メッセージ.....	83
RMAN Messages	88
ARCHIVELOG モードで実行できない.....	89
RMAN がバックアップまたはリストア中にエラーを発生して終了する	90
エージェントエラーが発生して RMAN ジョブが終了する	90
[回復 (ログの終端まで)] オプションが機能しない	90
バックアップまたはリストアが失敗する	91
oragentd_<job id> ログ ファイルの数が多すぎる	91
リストア中に Oracle データベースの権限エラーが発生する	91
別のディレクトリでの Oracle データ ファイルのリストア	92
「ジョブ内に Oracle パスワードがありません」というメッセージが表示されて、エージェン トが失敗する.....	92
同じデータベースのバックアップを同時に実行しようとする、エラー メッセージが表示さ れる	93
付録 C: agent.cfg および sbt.cfg ファイルの設定	95
agent.cfg 環境設定ファイル	95
デバッグ オプションの有効化.....	97
前のバックアップの復旧情報の複製先へのリストア	97
sbt.cfg パラメータ ファイル	98
NLS_LANG パラメータを設定する	104
第 5 章: 用語集	105
第 6 章: インデックス	107

第 1 章 : Agent for Oracle の概要

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[エージェントの特徴](#) (P. 10)

[エージェントの機能](#) (P. 11)

エージェントの特徴

Agent for Oracle は、バックアップおよびリストアのパフォーマンスの向上に役立つ以下の機能を提供します。

- **RMAN との完全な統合** - Agent for Oracle は RMAN (Recovery Manager) と完全に統合されています。RMAN は、データベースのバックアップ、リストア、およびリカバリを行うことができる Oracle のユーティリティです。Agent for Oracle のユーザインターフェースを使用することにより、バックアップ、リストア、およびリカバリ操作についてのすべての RMAN オプションにアクセスできます。Agent for Oracle は RMAN スクリプトを生成して希望の操作を実行し、生成された RMAN スクリプトは保存および識別することができます。Recovery Manager の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
- **製品間の相互運用性** - Agent for Oracle を使用してバックアップを実行した場合でも、RMAN を使用してリストアを実行できます。また、RMAN を使用してバックアップを実行している場合でも、Agent for Oracle を使ってリストアを実行できます。
- **マルチストリーミング** - Agent for Oracle は、RMAN のパラレル入出力機能、つまり、複数チャネルによるマルチストリーミングを使用します。さらに Agent for Oracle は、複数チャネルおよびノードの類縁性における負荷分散や RAC 環境でのチャネルフェールオーバーといった、RMAN の他の機能を利用できます。
- **ステージング** - Agent for Oracle では、複数の Oracle RMAN データベースインスタンスのステージングバックアップジョブを 1 つのジョブで実行できます。
- **Media Maximization (メディアの有効利用) 機能** - Agent for Oracle は、Media Maximization 機能を使用することによって、GFS ローテーションジョブでのテープの使用率を最適化し、テープ容量の無駄を最小限に抑えます。
- **クロスプラットフォームのバックアップ** - Agent for Oracle では、Linux プラットフォーム上の Oracle データベースを、Windows プラットフォーム上で実行されている Arcserve Backup サーバにバックアップできます。これにより、バックアップを一元化できます。

エージェントの機能

Agent for Oracle は、Oracle データベースがインストールされているコンピュータ上で動作します。Arcserve Backup は、物理データベース構成要素（データ ファイル、アーカイブ ログ、制御ファイルなど）のバックアップを実行する際に、Agent for Oracle にリクエストを送信します。エージェントは、Oracle データベースから指定されたデータベース オブジェクトを取得して Arcserve Backup に送信し、Arcserve Backup は、受信したデータベース オブジェクトをメディアにバックアップします。同様に、メディアから物理データベース構成要素がリストアされる際も、Agent for Oracle が必要なファイルを転送します。

データベースおよびデータベース オブジェクトのバックアップの詳細については、「データのバックアップ」の章を参照してください。Oracle バックアップおよびリカバリ手順の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

Note: In a Real Application Cluster (RAC) environment, a copy of the agent must reside on at least one node in the environment. In addition, this node must have access to all archive logs. バックアップの動作自体は基本的には同じです。

データベース全体のバックアップ

以下の方法によって、オンライン データベース バックアップを実行できます。

- データベースのバックアップを実行するには、Agent for Oracle のユーザ インターフェイスでオプションを選択し、RMAN スクリプトを生成します。
- エージェントで RMAN が呼び出され、このスクリプトが実行されます。
- RMAN が起動すると、他のエージェント ジョブが生成され、実際のバックアップが実行されます。

エージェント ジョブは RMAN からデータ ブロックを受信すると、それを Arcserve Backup に送信します。データはそこでメディア ドライブにバックアップされます。

注: Agent for Oracle と Arcserve Backup を使用すると、データベース全体をバックアップするのみでなく、データベース オブジェクトを個別にバックアップすることもできます。

エージェントを使用してオフラインバックアップを実行することも可能です。手順は以下のとおりです。

- オフラインデータベースバックアップを実行すると、バックアップ処理の開始前にデータベースが休止状態になります。
- 休止状態にすることで、バックアップ処理全体を通して **RMAN** からデータベースに継続的にアクセスできます。ただし、バックアップ中に、他のユーザがデータベースへのアクセスやトランザクションを行わないようにします。

第2章: エージェントのインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストールの前提条件](#) (P. 13)

[RAC 環境のエージェント](#) (P. 14)

[エージェントのインストール](#) (P. 14)

[インストール後の作業の実施](#) (P. 15)

[Recovery Manager に必要なインストール後タスク](#) (P. 26)

[エージェントの削除](#) (P. 30)

インストールの前提条件

Agent for Oracle をインストールする前に、以下のアプリケーションがインストールされていて、正常に動作していることを確認します。

- 本リリースの Arcserve Backup ベース製品
- 適切な種類およびバージョンの Linux
- 適切なバージョンの Oracle Server

注: Linux の適切なバージョン、およびご使用の環境に対応する Oracle Server のバージョンについては、*Readme* ファイルを参照してください。

エージェントをインストールするには、エージェントをインストールするマシンに対して、ソフトウェアをインストールするための root アクセス権のある管理者権限を持っている必要があります。

注: これらの権限がない場合は、Arcserve Backup 管理者に問い合わせ、適切な権限を取得してください。

RAC 環境のエージェント

To configure the agent in a Real Application Cluster (RAC) environment, you must install and configure the agent on at least one node that is a part of the RAC cluster and that has access to all archive logs. エージェントを RAC の 1 つ以上のノードにインストールできますが、各ノードはすべてのアーカイブログにアクセス可能である必要があります。エージェントを複数のノードにインストールする場合、バックアップは、バックアップマネージャで選択されたノードから実行されます。

Agent for Oracle で Oracle と同様の方法で、回復処理のすべてのアーカイブログにアクセスするには、RAC 環境の構築に関する Oracle の推奨事項に従う必要があります。Oracle では、回復時に、RAC 環境で、その発生元に関わらず、すべての必須アーカイブログにアクセス可能である必要があります。Agent for Oracle ですべてのアーカイブログにアクセスするには、以下の手順のいずれかを実行する必要があります。

- すべての必須アーカイブログを共有ディスクに格納する
- すべての必須アーカイブログを、マウントされている NSF ディスクに格納する
- アーカイブログの複製を使用する

エージェントのインストール

Agent for Oracle はクライアントプログラムです。このエージェントは、以下のいずれかにインストールします。

- Oracle Server が存在するサーバ
- Real Application Cluster (RAC) 環境の中で、すべてのアーカイブログにアクセス可能なノード (少なくとも 1 つ)

Agent for Oracle は、Arcserve Backup のシステム コンポーネント、エージェント、およびオプションの標準的なインストール手順に従ってインストールされます。Arcserve Backup のインストール方法については、「実装ガイド」を参照してください。

このセクションでは、Agent for Oracle のインストールの前提条件、注意事項のほか、インストール後のすべての作業の詳細な手順について説明します。

Note:You must install the agent on all Oracle database servers managed by Arcserve Backup.

インストール後の作業の実施

Agent for Oracle をインストールした後は、以下のインストール後の作業を実行します。

1. Oracle Server が ARCHIVELOG モードで稼働しているかどうかを確認します。
2. ARCHIVELOG モードで稼働していない場合は、ARCHIVELOG モードで Oracle Server を再起動します。
3. Oracle データベースの自動アーカイブ機能を有効にします。

注: For an Oracle 10g and 11g database, after you start archivelog mode, Oracle enables automatic archiving for you.他のすべてのデータベースについては、自動アーカイブを有効にするためには、「自動アーカイブ機能」のセクションにすべての手順に従ってください。

4. orasetup プログラムを実行して、Agent を設定します。
5. オプションではありますが、RMAN カタログの作成を強くお勧めします。また、このカタログは RMAN が管理していないデータベース上に作成されることもお勧めします。

重要: これらのインストール後の作業は、RAC ノードも含めて、エージェントをインストールしたマシンごとに実行する必要があります。

詳細情報:

[PFILE を使用して Oracle データベース インストールの自動アーカイブを有効にする \(P. 18\)](#)

[エージェントの環境設定 \(P. 21\)](#)

[RMAN カタログの作成 \(P. 24\)](#)

ARCHIVELOG モードの確認

redo ログをアーカイブするには ARCHIVELOG モードを有効にする必要があります。ARCHIVELOG モードが有効になっているかを確認するには、以下の手順に従います。

ARCHIVELOG モードが有効かどうかを確認する方法

1. SYSDBA の同等の権限を持つ Oracle ユーザとして Oracle サーバにログインします。
2. SQL*Plus のプロンプトで以下のコマンドを入力します。

ARCHIVE LOG LIST;

```
-bash-4.0$ sqlplus
SQL*Plus: Release 11.1.0.6.0 - Production on Fri Feb 9 23:17:53 2001
Copyright (c) 1982, 2007, Oracle. All rights reserved.

Enter user-name: sys as sysdba
Enter password:
Connected to an idle instance.

SQL> startup
ORACLE instance started.

Total System Global Area 421724160 bytes
Fixed Size 2107384 bytes
Variable Size 352323592 bytes
Database Buffers 62914560 bytes
Redo Buffers 4378624 bytes
Database mounted.
Database opened.
SQL> archive log list;
Database log mode Archive Mode
Automatic archival Enabled
Archive destination USE_DB_RECOVERY_FILE_DEST
Oldest online log sequence 4
Next log sequence to archive 6
Current log sequence 6
SQL>
```

このコマンドは、このインスタンスの Oracle のアーカイブ ログ設定を表示します。エージェントが正常に機能するためには、以下の設定が必要です。

Database log mode:Archive Mode

Automatic archival:有効

ARCHIVELOG モードでの実行

エージェントをインストールした後にデータベースをバックアップするには、ARCHIVELOG モードで実行する必要があります。

ARCHIVELOG モードでの実行方法

1. Oracle Server が稼働中の場合はシャットダウンします。
2. 以下のステートメントを Oracle で実行します。

Oracle の SQL*Plus のプロンプトでは以下を実行します。

```
CONNECT SYS/SYS_PASSWORD AS SYSDBA
STARTUP MOUNT EXCLUSIVE
ALTER DATABASE ARCHIVELOG;
ALTER DATABASE OPEN;
ARCHIVE LOG START;
```

ご使用の Oracle 10g または Oracle 11g サーバで Flash Recovery Area を使用していない場合は、PFILE または SPFILE のいずれかに以下のエントリを含める必要があります。

```
LOG_ARCHIVE_DEST_1="/opt/Oracle/oradata/ORCL/archive"
LOG_ARCHIVE_FORMAT="ARC%S_%R.%T"
```

Note: With Oracle 10g or Oracle 11g, the LOG_ARCHIVE_START and LOG_ARCHIVE_DEST entries are considered obsolete and should not be made, in either the PFILE or the SPFILE.

アーカイブ ログ モードで実行する理由の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

自動アーカイブ機能

オンラインまたはオフラインのデータベースから表領域をバックアップするには、対象データベースの自動アーカイブ機能を有効にする必要があります。

注: For an Oracle 10g and 11g database, Oracle enables automatic archiving after you start archivelog mode. その他のデータベースに対しては、このセクションにある適切な手順に従って自動アーカイブ機能を有効にする必要があります。

詳細情報:

[オフラインモードでのバックアップの実行 \(P. 38\)](#)

[オンラインモードでのバックアップの実行 \(P. 42\)](#)

PFIL を使用して Oracle データベース インストールの自動アーカイブを有効にする

Oracle データベースの設定を初期化パラメータ ファイルで行う場合、自動アーカイブ機能を有効にするには、`$ORACLE_HOME/dbs` ディレクトリの `INIT(SID).ORA` ファイルに以下のログ パラメータを追加します。

```
LOG_ARCHIVE_START=TRUE
LOG_ARCHIVE_DEST=<archive log directory>
LOG_ARCHIVE_FORMAT=%t_%s.dbf
```

ログ パラメータの一部を以下に示します。

- **LOG_ARCHIVE_START** - 自動アーカイブ機能を有効にします。
- **LOG_ARCHIVE_DEST** - アーカイブ REDO ログ ファイルへのパスを指定します。The Agent for Oracle queries Oracle Server parameters for the archive log destination in the following order: `LOG_ARCHIVE_DEST`, `LOG_ARCHIVE_DEST_1` and so on through `LOG_ARCHIVE_DEST_10`. エージェントは、最初に見つかったローカル デスティネーションのアーカイブ ログをバックアップします。
- **LOG_ARCHIVE_FORMAT** - アーカイブ ログ REDO ファイルのファイル名の形式を指定します。`%S` はログ ファイルのシーケンス番号、`%T` はスレッド番号を表します。たとえば、「`ARC%S.%T`」のように指定できます。

重要: Use a separator between numerical values. For example, `%S.%T`. If you omit the separator, archive log file names cannot be parsed because there is no way to determine which part is `%S` and which part is `%T`. また、同じ名前の複数のアーカイブ ログを作ってしまう可能性もあります。

SPFILE を使用して Oracle インストールで自動アーカイブ機能を有効にする

SPFILE を使用して Oracle インストールで自動アーカイブ機能を有効にすることができます。

SPFILE を使用して Oracle インストールで自動アーカイブ機能を有効にする方法

1. SQL*Plus のプロンプトで以下のコマンドを入力し、パラメータの値を検証します。

```
show parameter log
```

2. パラメータに正しい値が指定されていない場合は、サーバをシャットダウンした後に SQL*Plus のプロンプトで以下のコマンドを入力して、値を変更します。

```
CONNECT SYS/SYS_PASSWORD AS SYSDBA
```

```
STARTUP MOUNT EXCLUSIVE
```

```
ALTER SYSTEM SET LOG_ARCHIVE_START = TRUE SCOPE = SPFILE;
```

```
ALTER SYSTEM SET LOG_ARCHIVE_DEST = '/opt/Oracle/oradata/ORCL/archive'
```

```
SCOPE = SPFILE;
```

```
ALTER SYSTEM SET LOG_ARCHIVE_FORMAT = 'ARC%S.%T' SCOPE = SPFILE;
```

注: LOG_ARCHIVE_DEST の値は、実際の環境によって異なります。

3. 加えた変更を有効にするため、Oracle データベースを再起動します。

自動アーカイブの設定の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

ARCHIVELOG モードと NOARCHIVELOG モードの比較

以下の表に、ARCHIVELOG モードと NOARCHIVELOG モードの利点および欠点を示します。

Mode	利点	欠点
ARCHIVELOG モード	<p>ホットバックアップ(オンラインデータベースのバックアップ)を実行できます。</p> <p>Oracle データベースに加えられたすべての変更がアーカイブログファイルに記録されているため、アーカイブログと最新のフルオンライン/オフラインバックアップを、データを一切失わずに完全にリカバリできます。</p>	<p>アーカイブログファイルを保存するために追加のディスク容量が必要になります。しかし、エージェントには2回目のバックアップ後にアーカイブログファイルをパージするオプションが用意されているので、必要に応じてディスク容量を解放できます。</p>
NOARCHIVELOG モード	<p>アーカイブログファイルを保存しないため、追加のディスク容量が不要です。</p>	<p>Oracle データベースのリカバリが必要になった場合、リカバリできるのは最新のフルオフラインバックアップのみに限定されます。そのため、最新のフルオフラインバックアップ後に Oracle データベースに加えられた変更は、すべて失われます。</p> <p>バックアップ時に Oracle データベースをオフラインにする必要があるため、無視できないダウンタイムが発生します。このデメリットは、データベースの規模が大きい場合に特に深刻な問題となります。</p>

重要: NOARCHIVELOG モードでは Oracle データベースの障害回復が保証されないため、Agent for Oracle は NOARCHIVELOG モードをサポートしていません。Oracle Server を NOARCHIVELOG モードで運用する必要がある場合は、障害回復を確実にできるように、Oracle データベースをオフラインにしたうえで、エージェントを使用せずに Arcserve Backup を使用して Oracle データベース ファイルのフルバックアップを実行する必要があります。

RMAN を使用する場合は、データベースが ARCHIVELOG モードで実行されていることを確認してください。

エージェントの環境設定

エージェントをインストールした後、正しい手順に従って `orasetup` プログラムを実行してエージェントを設定する必要があります。

orasetup プログラムの実行方法

1. エージェントのホーム ディレクトリに切り替えます。
2. 以下のコマンドを入力して、`orasetup` プログラムを起動します。

```
./orasetup
```
3. エージェントのホーム ディレクトリを入力するように要求されます。デフォルトでは現在のディレクトリに設定されています。
 - デフォルトを選択する場合は、Enter キーを押します。
 - エージェントのホーム ディレクトリが現在のディレクトリと異なる場合は、ホーム ディレクトリのパス名を入力して Enter キーを押します。
4. `orasetup` プログラムは、ユーザがローカル Data Mover の上のデータのバックアップを予定しているかどうか尋ねます。
 - Data Mover がローカルにインストールされており、ローカル Data Mover の上のデータをバックアップする予定である場合は、「y」を入力し、Enter を押します。
 - Data Mover がローカルにインストールされていないか、ローカル Data Mover の上のデータをバックアップする予定でない場合は、「n」を入力し、Enter を押します。
5. このマシンに Oracle データベースがインストールされているかどうかを確認するメッセージが表示されます。「Y」を入力して Enter キーを押します。

-
6. データベースバックアップに **Recovery Manager** カタログを使用するかどうかを確認するメッセージが表示されます。使用する場合は、「Y」を入力して **Enter** キーを押します。

注: We recommend using an RMAN catalog when performing a backup because RMAN stores all relative backup information in this catalog, providing your data with the best protection possible.

7. 新しい環境設定を行っている場合は、**Arcserve Backup** で使用するすべての **Oracle** システム ID (SID) を登録するよう求めるメッセージが表示されます。新規のインストールではない場合は、既存の環境設定ファイルを再作成するかどうかを確認するメッセージが表示されます。既存の **instance.cfg** ファイルおよび **sbt.cfg** ファイルを保持する場合は、「N」を入力します。

注: 次の 2 つの環境設定ファイルが作成されます。 **instance.cfg** および **sbt.cfg** です。

- **orasetup** の実行時にこれらのファイルがすでに存在し、それらを上書きしない場合は、「n」を入力します。この場合、**instance.cfg** ファイルおよび **sbt.cfg** ファイルは変更されず、テンプレートファイルの **sbt.cfg.tmpl** が作成されます。その後、このテンプレートファイルを使用して、**sbt.cfg** ファイルを手動で調整できます。
 - これらの環境設定ファイルの上書きを選択した場合は、**instance.cfg** ファイルおよび **sbt.cfg** ファイルが新規に作成され、既存の **instance.cfg** ファイルおよび **sbt.cfg** ファイルは上書きされます。
 - エージェントは **instance.cfg** ファイルを使用して、新しい **Oracle** データベースの登録および変更を行います。 **instance.cfg** ファイルはいつでも設定できます。
8. **oratab** ファイルの内容の印刷を確認するメッセージが表示されます。設定したいものを選択します。
 9. エージェントで使用される **Oracle** データベース ID (**Database1**、**Database2** など) を指定するように要求されます。入力したら、**Enter** キーを押します。
 10. 前の手順で指定した **Oracle** データベースの **ORACLE_HOME** 環境変数を入力します。入力したら、**Enter** キーを押します。
 11. データベースのバックアップに **RMAN** カタログを使用するかどうかという質問に対して「Y (はい)」と答えた場合は、**RMAN** カタログを含むデータベースにアクセスする **Oracle Net** サービスの名前を入力します。

12. Oracle Agent ログ ファイルが保存されてから自動的に削除されるまでの日数を入力するように要求されます。デフォルト値は 30 日です。以下のいずれかの操作を行います。
 - デフォルトを使用する場合は、Enter キーを押します。
 - 30 日以外の日数を設定する場合は、その日数を入力して Enter キーを押します。
 - ログ ファイルが自動的に削除されないようにする場合は、「0」と入力します。
13. RMAN スクリプトが生成されてから自動的に削除されるまでの日数を入力するように要求されます。デフォルト値は 30 日です。以下のいずれかの操作を行います。
 - デフォルトを使用する場合は、Enter キーを押します。
 - 30 日以外の日数を設定する場合は、日数を入力して Enter キーを押します。
 - RMAN スクリプトが自動的に削除されないようにする場合は、「0」と入力します。
14. このホストに接続することができるユーザ名を入力するように要求されます。
15. ユーザのパスワードを入力するよう要求されます。

RMAN カタログの作成

Oracle データベースのユーティリティである RMAN (Recovery Manager) は、Oracle データベースのバックアップ、リストア、およびリカバリに使用します。RMAN を使用すると、管理者が行うバックアップ/リカバリの処理を大幅に簡略化できます。

RMAN および Arcserve Backup を使用し、独自の RMAN スクリプトを指定してバックアップを実行します。コマンドラインでリカバリ カタログを指定してもしなくても RMAN に直接接続することで、RMAN を直接使用して、オンラインデータベース オブジェクトをバックアップできます。

Note: エージェントまたは RMAN をバックアップに使用している場合、別のデータベースにインストールされたリカバリ カタログを作成することをお勧めします。RMAN で Oracle データベースをバックアップすると、エージェントと RMAN のどちらを使用してもデータベースをリストアできます。同様に、Agent for Oracle を使用して Oracle データベースをバックアップすると、RMAN とエージェントのどちらを使用してもデータベースをリストアできます。

Recovery Manager の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

RMAN カタログはバックアップを実行する際に使用できます。RMAN はこのカタログにすべての関連バックアップ情報を格納します。このカタログがないと、RMAN ではバックアップを管理するために制御ファイルのみに依存するようになります。これはとてもリスクの高い状態です。すべての制御ファイルが失われた場合、RMAN ではデータベースをリストアできなくなります。さらに、制御ファイルもリストアできなくなるため、データベースは失われます。

注: RMAN カタログを使用したバックアップ ジョブやリストア ジョブの実行時には、必ずカタログ データベースが使用可能な状態にあることを確認してください。

RMAN カタログを作成する方法

Note: リストア時に RMAN はカタログに大きく依存するため、カタログを別のデータベース（つまり、バックアップ対象データベース以外のデータベース）で作成する必要があります。

1. 以下の SQL*Plus コマンドを使用して、新しい表領域を作成します。

```
* create tablespace <RMAN カタログ表領域> datafile <データファイル名> size <データファイルサイズ> m;
```

2. 以下のコマンドを入力して、RMAN カタログの所有者になるユーザを作成します。

```
* create user <RMAN カタログの所有者> identified by <パスワード> default tablespace <RMAN カタログ表領域> quota unlimited on <RMAN カタログ表領域>;
```

3. 以下のコマンドを使用して、このユーザに正しい権限を割り当てます。

```
* grant recovery_catalog_owner to <RMAN カタログの所有者>;
```

4. 新しいコマンドプロンプトを開き、以下のコマンドを実行して RMAN のカタログ データベースに接続します。

```
rman catalog <RMAN カタログの所有者> / <RMAN カタログのパスワード> @rmandb
```

ここで、rmandb は RMAN カタログ データベースの TNS 名です。

5. このコマンドを使用して、カタログを作成します。

```
create catalog;
```

6. RMAN のカタログ データベースとターゲット データベースに接続します。

```
* rman target <sysdba 権限を持つユーザ (sys) > / <ユーザ (sys) のパスワード> @targetdb catalog <RMAN カタログの所有者> / <RMAN カタログのパスワード> @rmandb
```

rmandb は、RMAN カタログ データベースの TNS 名、targetdb はターゲット データベースの TNS 名です。

7. 以下のコマンドを実行します。

```
register database;
```

Recovery Manager の使用法の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

重要: RMAN カタログを使用しない場合、フォールトトレランスのためにファイルシステムバックアップを使用したり、制御ファイルをミラーリングしたりして、ユーザ自身が制御ファイルを管理する必要があります。

Recovery Manager に必要なインストール後タスク

Oracle Recovery Manager (RMAN) を使用するには、以下のインストール後のタスクを実行する必要があります。

- 以下のアクションの**いずれか**を実行して、ライブラリ ファイルを使用します。
 - Oracle のリンクを、Arcserve® libobk ライブラリ ファイルを使用するように変更します。
 - RMAN スクリプトで SBT_LIBRARY を使用します。
- クライアント ホストの定義を Arcserve Backup データベースに追加します (まだの場合)。
- Oracle データベース ファイルを所有する Oracle ユーザを Arcserve Backup ユーザと同等の権限で追加します。
- RMAN 変数を設定します。

SBT 2.0 インターフェース

SBT (テープへのシステム バックアップ) SBT 2.0 インターフェースは、Oracle API (アプリケーション プログラミング インターフェース) です。これによって Arcserve Backup が有効化され、RMAN にバックアップおよびリストア機能が提供されます。このインターフェースは、`sbt.cfg` パラメータ ファイルおよび Arcserve Backup の `ca_backup` および `ca_restore` コマンドを使用して、RMAN からバックアップおよびリストア処理を開始します。

SBTライブラリでの sbt.cfg パラメータファイルの使用方法

SBT ライブラリは、sbt.cfg パラメータファイルを使用して、エージェントと通信します。このファイルに含まれている各種のユーザ定義パラメータは、ca_backup コマンドおよび ca_restore コマンドを使用してバックアップジョブおよびリストアジョブをサブミットしたときに Arcserve Backup に渡されます。初期 sbt.cfg 環境設定ファイルは、エージェントのセットアップ時に orasetup プログラムによって作成されます。

orasetup では、パスワードが自動的に暗号化されて sbt.cfg ファイルに配置されます (SBT_PASSWORD)。パスワードを変更する場合は、まず cas_encr <password> を実行して、暗号化された ASCII 値を取得する必要があります。cas_encr の実行結果のサンプルは、以下のようになります。

```
# cas_encr password  
CAcrypt:HGJD92748HNNCJSFDHD764
```

この値の取得後、CAcrypt 文字列を含む値全体を SBT_PASSWORD 変数の値として、sbt.cfg ファイルにコピーする必要があります。

重要: cas_encr を使用する前に、共通エージェントディレクトリが含まれるように、ライブラリパスを変更する必要があります。例:

```
#LD_LIBRARY_PATH=$LD_LIBRARY_PATH:/opt/Arcserve/ABcmagt
```

Linux オペレーティングシステムのライブラリパスを設定するには、以下のガイドラインに従います。

```
LD_LIBRARY_PATH=opt/Arcserve/ABcmagt:$LD_LIBRARY_PATH
```

注: RMAN ディレクトリの使用を選択した場合、sbt.cfg ファイルによりデフォルト値が提供されます。

SBT インターフェースでの libobk ライブラリファイルの使用方法

SBT インターフェースは、libobk ライブラリ ファイルによって実装されます。Oracle Server には、デフォルトの libobk.* ライブラリ ファイルが用意されています。ただし、RMAN を使用したバックアップ ジョブやリストア ジョブが正常に行われるために、RMAN では、デフォルトの Oracle バージョンではなく、以下に挙げるいずれかの Arcserve バージョンの libobk.* を使用する必要があります。

- libobk.*.2.32 (SBT 2.0 インターフェースの 32 ビット実装)
- libobk.*.2.64 (SBT 2.0 インターフェースの 64 ビット実装)

その他の考慮事項を以下に挙げます。

- Oracle 9i、10g、11g では、SBT 1.1 と SBT 2.0 の両方がサポートされます。Oracle 9i、10g、11g と SBT 2.0 を使用することをお勧めします。
- When the agent is installed, the libobk32.* and libobk64.* symbolic links are created in the agent home directory. These symbolic links are used in the RMAN scripts generated by the agent as a value to the SBT_LIBRARY parameter. 自分でスクリプトを作成した場合も、これらのリンクを使用できます。

Oracle および CA の libobk ライブラリファイル

RMAN で Arcserve バージョンの libobk のいずれかを使用する場合は、Oracle リンクを再設定する必要があります。

以下のセクションでは、Oracle リンクの再設定の手順について説明します。Oracle データベースのリンクを再設定するには、ご使用のオペレーティングシステムのセクションを参照し、Linux オペレーティングシステムおよび Oracle Server のバージョンに対応した手順を実行します。

Important! By default, the symbolic link \$ORACLE_HOME/lib/libobk.s* exists and points to an existing Oracle library. リンクを再設定する前に、このリンクを \$CAORA_HOME/libobk.s* にリダイレクトする必要があります。ご使用の環境に適したリンクのリダイレクト方法については、Oracle データベースのマニュアルを参照してください。

Linuxでのリンクの再設定

Linux上で動作する Oracle データベースのリンクを再設定するには、以下の手順に従います。

1. Oracle Database ソフトウェアを所有するユーザアカウントに切り替えます。
2. 以下のいずれかの操作を実行します。

Oracle 9i、10g および 11g のいずれかを使用している際に、`$ORACLE_HOME/lib` ディレクトリに切り替えて、以下のコマンドを入力します。

- 32 ビット Oracle の場合

```
ln -s /opt/Arcserve/ABoraagt/libobk.so.2.32 $ORACLE_HOME/lib/libobk.so
```

- 64 ビット Oracle の場合

```
ln -s /opt/Arcserve/ABoraagt/libobk.so.2.64_AMD64 $ORACLE_HOME/lib/libobk.so
```

考慮事項

- Oracle データベースの実行可能ファイルと Arcserve が提供しているライブラリが適切にリンクしているかどうかを確認するには、`$ORACLE_HOME/bin` ディレクトリに切り替え、`ldd -r` コマンドを入力して、実行可能ファイルにリンクされているライブラリを一覧表示してください。
- 手順 2 のすべてのアクションで、`libobk` ライブラリは、以下のライブラリの完全修飾パスになります。
 - `libobk.so.2.32` (32 ビット x86 SBT 2 バージョン)
 - `libobk.so.2.64_AMD64` (64 ビット AMD64 SBT 2 バージョン。SBT 1 なし)

デフォルトの格納場所は、エージェントのホーム ディレクトリです。

Oracle データベース ユーザを Arcserve Backup ユーザと同等の権限として追加

バックアップするには、Oracle データベース ファイルを所有する Oracle ユーザを、Arcserve Backup ユーザと同等の権限として追加する必要があります。

ユーザを追加するには、以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup がロードされ、実行されていることを確認します。
2. Arcserve Backup のホーム フォルダに移動して、以下のコマンドを入力します。

```
ca_auth [-cahost CAAB_hostname] -equiv add <Oracle ユーザ名> <Linux ホスト名> CAAB_username  
[CAAB_username] [CAAB_userpassword]
```

CAAB_username は Arcserve Backup 管理者である必要があります。

注: Real Application Cluster (RAC) 環境にエージェントをインストールしている場合、Oracle データベース ファイルを所有する Oracle データベース ユーザを、Arcserve Backup ユーザと同等の権限として、RAC クラスタを構成する各ノードに追加する必要があります。

エージェントの削除

Agent for Oracle をサーバから削除するには、インストール CD の手順に従います。

重要: エージェントを削除する前に、Oracle を停止し、libobk ライブラリのリンクを解除してください。これらの手順は、Oracle を Arcserve ライブラリにリンクしている場合にも、あるいはインストール後の作業で指定されたとおりに Oracle lib サブディレクトリにソフトリンクを作成している場合にも、該当します。

第3章：データのバックアップ

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[バックアップの基礎](#) (P. 31)

[バックアップ](#) (P. 35)

[バックアップに関する制限事項](#) (P. 51)

バックアップの基礎

「バックアップ」とは、データベース全体またはデータベース オブジェクトのコピーを、別のデバイス（通常はテープ デバイス）に作成することです。バックアップは、Arcserve Backup、Agent for Oracle、および Oracle RMAN バックアップ機能を使用して実行されます。

Arcserve Backup、エージェント、および Oracle RMAN を使用して、Oracle Server データベース全体、またはデータベース内の個別のオブジェクトをバックアップできます。データベース全体をバックアップする場合は、その Oracle データベースを構成するすべてのオブジェクトをバックアップするように設定します。データベースを初めて作成したとき、またはデータベース構造を変更したときは、通常、データベース全体をバックアップする必要があります。また、表領域などの各物理データベース構成要素は、リカバリの所要時間を短縮するために、より頻繁にバックアップすることをお勧めします。

バックアップ計画

データベースを作成する前に、バックアップの計画を立てる必要があります。If you do not plan these strategies before you create a database, database recovery may not be possible in certain cases.

バックアップ計画を立てたら、その計画を実際の環境に適用する前に、テスト環境でテストを実施しておくことをお勧めします。バックアップ/リストア計画のテストを実施しておけば、障害が現実となった場合に発生する可能性がある問題を事前に洗い出して、可能な限り解決しておくことができます。

バックアップ計画の作成

バックアップ方針を持つには、以下を行う必要があります。

- Oracle データベースのフル オンラインバックアップを実行します。
- 定期的にコールド データベース バックアップを実行します。コールド データベース バックアップとは、データベースをシャット ダウンして、Oracle 環境のファイル システム バックアップを実行することです。
- データベース構成要素をバックアップして、データベースのフルバックアップデータを更新します。使用頻度が非常に高い表領域がある場合は、リカバリの所要時間を短縮するために、その表領域をより頻繁にバックアップする必要があります。
- Back up the database control files each time you make a structural change to the database.
- Oracle のオンライン REDO ログをミラー化します。この処理は Agent for Oracle では実行できません。オンライン REDO ログのミラーリングの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

Oracle バックアップおよびリカバリ手順の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

Oracle Server の構成

Oracle Server は複数のデータベースから構成され、各データベースは、複数のデータベース オブジェクトに分割されます。Oracle データベースを構成する要素には、以下のものがあります。

- 表領域 - データベースのデータが格納されています。表領域は複数のデータ ファイルで構成されている場合もあります。
- データ ファイル - データベース データが格納されている、表領域を定義する物理ファイルです。
- オンライン REDO ログ ファイル/アーカイブ ログ ファイル - Oracle データベースに加えられたすべての変更が記録されています。
- 制御ファイル - Oracle データベースの構成に関する情報（表領域情報など）が記述されています。1 つの Oracle データベースに、複数の制御ファイルが存在する場合があります。
- パラメータ ファイル - データベースの起動時に使用されるさまざまな初期化パラメータが格納されています。
- リカバリ領域（最新バージョンの Oracle の場合） - Oracle データベースの回復に関するファイルおよびアクティビティから構成されています。

Online Redo Log Files

Oracle Server uses online redo log files to record all entries to the Oracle tablespaces.ただし、Agent for Oracle では、正常に動作する上でアーカイブ オンライン REDO ログ ファイルが必要です。For Oracle to create archived redo log files, you must set Oracle to operate in ARCHIVELOG mode.Also, for the agent to back up and restore properly, you must set Oracle to automatically archive online redo log files.

注: ARCHIVELOG モードで動作し、オンライン REDO ログ ファイルを自動的にアーカイブするように Oracle データベースを設定する方法については、「[インストール後の作業の実施](#) (P. 15)」を参照してください。

複数のデータベース

Oracle が複数のデータベースで構成されている場合は、以下のような操作を行うことができます。

- データベースの表示およびログイン
- エージェントのホーム ディレクトリから **orasetup** を実行してエージェントを再構成した場合、指定した Oracle データベースを表示して、そのデータベースにログインできます。
- エージェントを適切に設定することで、指定した任意の Oracle データベースを [バックアップ マネージャ] ウィンドウに表示できます。
- バックアップ対象のデータベース オブジェクトをすばやく検索できます。

複数データベース環境のバックアップ セッションの設定

複数のデータベースで構成される Oracle 環境で、インストール時に指定した Oracle データベースを表示したり、データベースにログインしたりするには、以下の手順に従ってバックアップセッションを設定します。

複数データベース環境のバックアップ セッションを設定する方法

1. Arcserve Backup を起動して、バックアップ マネージャを開きます。
バックアップ マネージャが開きます。
2. [ソース] タブで、Linux エージェントを展開します。
3. Linux エージェントの下で、Oracle がインストールされているホストの左側にある緑色の四角形をクリックします。
[ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. システムのユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。
5. ホストを展開します。
6. Oracle データベースの左側にある緑色の四角形をクリックします。
データベースのログイン用ダイアログ ボックスが表示されます。

7. Oracle dba ユーザ名とパスワードを入力します。
8. Click OK.

これでデータベースを展開し、バックアップするデータベース オブジェクトを選択できます。

バックアップ

Using the agent, you can back up complete Oracle databases and individual Oracle database objects, such as tablespaces, data files, archived redo log files, control files, parameter files, and the recovery area.

You should back up all of the objects in a database immediately after you create the database and maintain a regular backup schedule to ensure smooth recovery in case of database or media failure. Arcserve Backup で、自動バックアップ スケジュールの設定や調整ができます。

Agent backups are performed through scripts the agent sends to the Oracle Recovery Manager (RMAN). これらのスクリプトは、バックアップ マネージャ で選択されたオプションに基づいて自動生成され、<oracle agent home dir>/rman_scripts の下に保存されます。これらは、agent.cfg ファイルの環境変数 <DAYS_RMAN_SCRIPTS_RETAINED> に設定された時間だけ保存されます。

Recovery Manager (RMAN)

Oracle データベースのユーティリティである RMAN (Recovery Manager) は、Oracle データベースのバックアップ、リストア、およびリカバリに使用します。RMAN によって実行されるバックアップおよびリカバリの重要な処理によって、管理者が行う作業を大幅に簡略化できます。RMAN の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

RMAN および Arcserve Backup を使用し、独自の RMAN スクリプトを指定してバックアップを実行します。コマンドラインでリカバリ カタログを指定してもしなくても RMAN に直接接続することで、RMAN を直接使用して、オンラインデータベース オブジェクトをバックアップできます。

注:バックアップにエージェントまたは RMAN を使用する場合、別にデータベースに回復のカタログを作成することをお勧めします。

RMAN で Oracle データベースをバックアップすると、エージェントと RMAN のどちらを使用してもデータベースをリストアできます。同様に、Agent for Oracle を使用して Oracle データベースをバックアップすると、RMAN とエージェントのどちらを使用してもデータベースをリストアできます。

RMAN 前提条件

RMAN およびエージェントを使用してバックアップを実行する前に、以下の操作を行う必要があります。

- 以下のアクションのいずれかを実行して、Arcserve libobk ライブラリファイルを使用します。
 - Oracle のリンクを再設定します。
 - RMAN スクリプト(プラットフォームおよび Oracle のバージョンによって異なる) の SBT_LIBRARY を使います。
- Oracle データベース ファイルを所有する Oracle ユーザを Arcserve Backup ユーザと同等の権限で追加します。

注: これらのタスクの実行方法については、「[Recovery Manager に必要なインストール後のタスク \(P. 26\)](#)」を参照してください。

バックアップの方式

Arcserve Backup およびエージェントを使用して、複数の種類のバックアップを実行できます。

- オフラインバックアップ
- オンラインバックアップ
- ステージングバックアップ
- マルチストリーミング（またはマルチチャネル）バックアップ
- ユーザが作成した RMAN スクリプトをバックアップマネージャにロードすることによる起動バックアップ

Note:You can also use RMAN directly to launch backups at the command line level.

Oracle データベース オフラインのバックアップ

エージェントを使用してオフラインバックアップを実行すると、バックアップ処理の開始前にデータベースが休止状態になります。理由は、RMAN からデータベースに接続できる必要があるためです。つまり、データベース処理が実行中で接続を受け入れる必要があります。本当のオフラインバックアップを実行すると、このように接続できません。RMAN からデータベースに接続し、オンラインにしないためには、休止状態を利用するしかありません。休止状態ではユーザのトランザクションはすべて発生しません。

Note:本当のオフラインバックアップを実行するには、手動でデータベースをシャットダウンしてから、エージェントでデータベースをバックアップします。データベースをリストアするにはエージェントを改めて使用して、手動でデータベースを起動します。

オフラインモードでのバックアップの実行

以下の手順に従って、オフラインモードでバックアップを実行できます。

Oracle データベースのバックアップをオフラインモードで実行する方法

注: Before opening the Backup Manager, ensure that Oracle Server is running, and be sure to start Arcserve Backup and the agent.

1. バックアップマネージャを開き、[ソース]タブを選択して Linux エージェントを展開します。
2. Linux エージェントの下の、Oracle データベースがインストールされているホストの左側にある緑色の四角形をクリックします。

[ログイン] ダイアログボックスが表示されます。

3. ホストのユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

ホストが展開されます。

4. バックアップする Oracle データベースの左側にある緑色の四角形をクリックします。

[ログイン] ダイアログボックスが表示されます。

5. Oracle dba のユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

四角形全体が緑色で塗りつぶされます。

Note: as sysdba 節を使用して Oracle データベースに接続する権限が割り当てられている Oracle のユーザ名とパスワードを使っているかどうかを確認してください。as sysdba 節を使用するかどうかに関係なく接続できる必要があります。

6. バックアップ オプションを設定するには、[ソース] タブを選択し、[Oracle オプション] タブをクリックします。

[Oracle バックアップ オプション] ダイアログ ボックスが開きます。

以下のフィールドに入力します。

- Oracle DB ユーザ情報を入力します。
- [RMAN カタログを使用 (推奨)] チェック ボックスがオンになっていることを確認します。

注: RMAN カタログの使用をお勧めします。使用しないと、RMAN ではバックアップを管理するときに制御ファイルのみを使用します。制御ファイルのみを使用すると、データベースおよびすべての制御ファイルが何らかの事情で失われた場合、RMAN はデータベースをリストアできなくなります。RMAN カタログ オプションを使うと、制御ファイルのバックアップ関連情報やその他の重要な情報が失われるのを防ぐことができます。また、RMAN カタログを使用しない場合、Point-in-Time リカバリを実行できなくなる可能性があります。

このオプションを選択しない場合、RMAN カタログの重要性を指摘する警告メッセージが表示されます。

- [バックアップの種類] でオフライン モードを選択します。

- 以下のバックアップ方式から 1 つを選択します。

フルバックアップ - 一般的に、この方法を使用すると、データベースのリストアに必要なテープ数は最も少なくなります。ただし、バックアップ時間が長くなります。

増分バックアップ - この方法を使用するとバックアップ時間は短くなりますが、一般的に、リストアに要する時間とロードするテープ数は増えます（つまり、最新のフルバックアップとすべての増分バックアップが必要になります）。

- チャンネル数（ストリーム数）を選択できます。

7. (オプション) [高度な Oracle オプション] タブを選択し、バックアップのパフォーマンスを変更したい場合はフィールドに入力します。:

- **バックアップピースサイズ - RMAN** で複数のバックアップピースを生成する場合は、[バックアップピースサイズ] フィールドに数値 (KB 単位) を入力します。
- **読み取り速度 (バッファ数) - RMAN** がディスクからデータを読み込むときの 1 秒当たりの最大バッファ数を [読み取り速度 (バッファ数)] フィールドに入力します。
- **バックアップセットごとのファイル数 - RMAN** がバックアップセットごとに使用するバックアップピースの数を制限するには、[バックアップセットごとのファイル数] フィールドにピースの数を入力します。
- **開いているファイルの最大数 - RMAN** が同時に開くファイルの総数を制限するには、[開いているファイルの最大数] フィールドにファイルの最大数を入力します。このフィールドを空にしておくと、RMAN はデフォルト値を使用します。
- **バックアップセットサイズ (KB) -** バックアップセットに含まれるデータ量を制限するには、[バックアップセットサイズ (KB)] フィールドにサイズを入力します。このフィールドは、空にしておくことをお勧めします。
- **ブロックサイズ (バイト) -** バックアップの実行時にエージェントに送信するデータブロックのサイズを RMAN で決定できるようにするには、[ブロックサイズ (バイト)] フィールドに値を入力します。

Note: このフィールドに値を入力する場合、リストア処理時にエラーメッセージを受信しないように、リストア時に同じ値を入力する必要があります。

- **コピー数 - RMAN** で生成するバックアップ ピースのコピー数を指定するには、このフィールドに 1 から 4 の間で数字を入力します。

Note:2 つ以上のコピーを生成できるようにするためには、`init<sid>.ora` または `SPFILE` ファイルの `[BACKUP_TAPE_IO_SLAVES]` オプションを有効にする必要があります。有効にしないと、エラーメッセージが表示されます。

- **コピー数が複数で、同じ数のドライブが使用可能でない場合ジョブを失敗にする** - このフィールドをオンにすると、コピー数が複数あり、それを受け入れるのに十分な数のデバイスにジョブがアクセスできない場合、そのバックアップ ジョブは失敗します。オフにした場合は、コピー数を満たす十分な数のデバイスにアクセスできない場合でも、バックアップ ジョブの実行が続行されます。ただし、コピー数は少なくなります。
 - **デバイスが利用可能になるまでの待機時間 (分)** - バックアップ ジョブが、必要な数のデバイスにアクセスできない場合に何分待機するかを指定します。[要求されたデバイスで使用できないものがある場合にもバックアップを続行する] フィールドと共に使用します。
 - **要求されたデバイスで使用できないものがある場合にもバックアップを続行する** - このオプションをオンにした場合、少なくとも 1 つのデバイスが利用可能であれば、バックアップ ジョブの実行が続行されます。オフにした場合、[デバイスが利用可能になるまでの待機時間 (分)] フィールドに指定した時間内に十分なデバイスにアクセスできなければ、ジョブは失敗します。
8. [デスティネーション] タブ を選択し、バックアップを保存したいメディア デバイス グループおよびメディアを選択します。
- 重要:** [チャンネル数] オプションで 1 より大きい数を設定した場合は、[デスティネーション] タブで特定のメディアまたはメディア デバイス グループを選択しないでください。
9. [スケジュール] タブをクリックし、以下のスケジュールタイプから 1 つを選択します。
- カスタム
 - ローテーション
 - GFS ローテーション
10. [開始] をクリックします。

The Submit Job dialog opens.

-
11. ジョブをすぐに実行するか、または後で実行するかをスケジュールします。Click OK.

[ジョブのサブミット] ダイアログ ボックスが開きます。

12. Click OK.

ジョブがサブミットされます。これで、ジョブ ステータス マネージャからジョブをモニタできるようになります。

バックアップのモニタリングに関する制限については、本章の「バックアップに関する制限事項」を参照してください。

Note:1 つのオブジェクトのみを選択している場合でも、1 回のバックアップで、メディアに対して複数セッションが作成されることがあります。たとえば、[高度な Oracle オプション] タブの [バックアップセットサイズ] フィールドに制限を入力した場合、複数のセッションを作成します。

Oracle データベースのオンラインでのバックアップ

Agent for Oracle を使用すると、Oracle データベース オブジェクト (表領域、データ ファイル、アーカイブ REDO ログ ファイル、パラメータ ファイル、制御ファイルなど) を個別にバックアップできます。

オンライン モードでのバックアップの実行

エージェントを使用して Oracle データベースをオンラインでバックアップする方法

注:バックアップ マネージャを開く前に、Oracle Server が実行中であり、バックアップ対象のデータベースのすべての表領域がオンラインであることを確認してください。また、Arcserve Backup とエージェントも必ず開始してください。

1. バックアップ マネージャを開き、[ソース] タブを選択して Linux エージェントを展開します。
2. Linux エージェントの下で、Oracle がインストールされているホストの左側にある緑色の四角形をクリックします。

[ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

Note: If you click the plus sign next to the host, it will expand automatically after you log in successfully.

3. ホストのユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

Note:ホストが自動的に展開しない場合は、手動で展開します。

4. **Oracle** データベースの左側にある緑色の四角形をクリックして、データベースを選択します。

データベースのログイン用ダイアログ ボックスが表示されます。

5. **Oracle dba** ユーザ名とパスワードを入力します。

Note:as sysdba 節を使用して **Oracle** データベースに接続する権限が割り当てられている **Oracle** のユーザ名とパスワードを使っているかどうかを確認してください。as sysdba 節を使用するかどうかに関係なく接続できる必要があります。

6. データベースをバックアップする際、マスタ ジョブと呼ばれる 1 つのジョブがキューに作成されます。バックアップが開始されると、マスタ ジョブから **RMAN** が呼び出され、子ジョブが実行されます。

サブジョブがジョブ キューに表示されます。

7. バックアップジョブにオプションを設定したい場合は、[ソース] タブを選択し、[Oracle オプション] タブをクリックします。

The screenshot shows the 'Oracle Backup Options' dialog box with the 'Advanced Oracle Backup Options' tab selected. The 'Oracle DB User Information' section contains fields for 'User Name' (set to 'system'), 'User Password' (masked with asterisks), and 'Database Name' (set to 'Oracle:orcl'). There are also fields for 'Owner Name' and 'Owner Password'. The 'Backup Type' section has 'Online' selected. The 'Backup Method' section has 'Full Backup' selected. Other options include 'Use RMAN catalog (Recommended)' which is checked, 'Incremental Level' set to 0, 'Cumulative' unchecked, 'Number of Channels (Streams)' set to 1, 'Backup Piece Format' with a template '_%u_%p_%c_', and 'Purge Log After Log Backup' unchecked. 'OK' and 'Cancel' buttons are at the bottom right.

以下のフィールドに入力します。

- データベース名がインスタンス名と異なる場合は、データベース名を [データベース名] フィールドに入力します。
- [RMAN カタログを使用 (推奨)] チェック ボックスがオンになっていることを確認してください。

注: RMAN カタログの使用をお勧めします。使用しないと、RMAN ではバックアップを管理するときに制御ファイルのみを使用します。制御ファイルのみを使用すると、データベースおよびすべての制御ファイルが何らかの事情で失われた場合、RMAN はデータベースのリストアができなくなります。RMAN カタログ オプションを使うと、制御ファイルのバックアップ関連情報やその他の重要な情報が失われるのを防ぐことができます。また、RMAN カタログを使うと、必要に応じて Point-in-Time リカバリを実行することができます。

このオプションを選択しない場合、RMAN カタログの重要性を指摘する警告メッセージが表示されます。

- カタログの所有者名および所有者のパスワードを入力します。
- オンライン モードを選択します。
- 以下のバックアップ方式から 1つを選択します。
 - **フルバックアップ** - 通常、データベースのリストアに必要なテープの数が最小限になりますが、バックアップに時間がかかります。
 - **増分バックアップ** - バックアップの時間が短縮されますが、通常はリストア時の所要時間とロードするテープ（最後のフルバックアップとすべての増分バックアップ）の数が多くなります。

Note:使用可能なオプションは、特定のデータベースのみに適用されます。データベースにはそれぞれ固有のオプションがあります。

8. (オプション) [高度な Oracle オプション] タブを選択し、バックアップのパフォーマンスを変更したい場合はフィールドに入力します。
9. [デスティネーション] タブをクリックし、バックアップ先を選択します。

重要: [チャンネル数] オプションで 1 より大きい数を設定した場合は、[デスティネーション] タブで特定のメディアまたはメディア デバイスグループを選択しないでください。

10. [スケジュール] タブをクリックし、以下のスケジュールタイプから 1つを選択します。
 - カスタム
 - ローテーション
 - GFS ローテーション
11. ツールバーの [サブミット] をクリックします。

The Submit Job dialog opens.

12. ジョブをすぐに実行するか、または後で実行するかをスケジュールします。

Click OK.

[ジョブのサブミット] ダイアログ ボックスが開きます。

13. Click OK.

ジョブがサブミットされます。これで、ジョブ ステータス マネージャからジョブをモニタできるようになります。

バックアップのモニタリングに関する制限については、本章の「バックアップに関する制限事項」を参照してください。

注: For more information about customizing backup jobs, see the *Administration Guide*.

Multistreaming Backups

システムに 2 つ以上のドライブおよびボリュームがある場合は、バックアップ マネージャ上で [チャンネル数 (ストリーム)] オプションを使って、バックアップのパフォーマンスを向上させることができます。バックアップに使用するために一定の数のチャンネルを割り当てた後、Agent および RMAN は、複数のチャンネルの組織方法および分散方法、指定されたチャンネルがすべて必要かどうかについて決定します。場合によっては、指定されたすべてのチャンネルを使う代わりに、チャンネルごとに複数のジョブ (バックアップ ピース) を順次パッケージ化したほうがより適切にジョブが実行される、と RMAN で判断され、結果としてジョブには少数のチャンネルのみを使用することもあります。

Note: Previous releases of the agent used the Multistreaming option on the Destination tab to accomplish this type of backup. The Number of Channels (Streams) option replaces the Multistreaming option and provides better integration with RMAN, which allows RMAN to handle the multistreaming process rather than the agent. Beginning with this release, the Multistreaming option in the Backup Manager is ignored for Oracle jobs.

重要: バックアップ マネージャで複数のチャンネルを指定した後は、[デスティネーション] タブで特定のメディアまたはメディア デバイス グループを選択しないようにしてください。マルチストリーミングができなくなります。

システムで使用可能なメディアまたはメディア デバイス グループの数により、**RMAN** が同時に実行できるジョブの数が制限されます。マルチ ストリーミングの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

チャンネル(ストリーム)オプションの数を指定してバックアップ

ここでは、2 基のテープ ドライブを搭載したチェンジャにデータをバックアップする例を紹介します。同じ種類の複数の単一テープ ドライブを所有し、それらすべてをマルチ ストリーミング バックアップ ジョブで使用する場合は、テープが各デバイス グループに割り当てられていることを確認してください。

マルチ ストリーミングを使用してバックアップする方法

1. バックアップ マネージャの [ソース] タブで、2 つの表領域を選択します。
2. Oracle の [オプション] タブの [チャンネル数 (ストリーム)] オプションで 2 以上の数字を指定します。バックアップ ジョブに必要な実際のチャンネル数は、**RMAN** で判断されるので、注意が必要です。Oracle の [オプション] タブで入力した値は、**RMAN** で使用されるチャンネルの最大数です。

3. (オプション) メディア プールの名前を指定します。この名前には、既存のメディア プールの名前、またはマルチ ストリーミング ジョブのために作成する新しいメディア プールの名前を指定できます。

注: 特定のメディアやメディア デバイス グループを指定しないでください。指定すると、マルチ ストリーミングが発生しなくなります。

4. [サブミット] をクリックして、ジョブをサブミットします。

これで、ジョブ ステータス マネージャからジョブをモニタできるようになります。

エージェントでの RMAN スクリプトを使用したバックアップ

RMAN スクリプトを作成し、Arcserve Backup GUI から開始できます。

RMAN スクリプトのあるエージェントを使用して Oracle データベースをバックアップする方法

1. バックアップ マネージャを開き、[ソース] タブを選択して Linux エージェントを展開します。
2. Linux エージェントの下で、Oracle がインストールされているホストの左側にある緑色の四角形をクリックします。

[ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

Note: If you click the plus sign next to the host, it will expand automatically after you log in successfully.

3. ホストのユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

注: ホストが自動的に展開しない場合は、手動で展開します。

4. Oracle データベースの左側にある緑色の四角形をクリックして、データベースを選択します。

データベースのログイン用ダイアログ ボックスが表示されます。

5. Oracle dba ユーザ名とパスワードを入力します。
6. [高度な Oracle オプション] タブをクリックし、[RMAN スクリプトのロード] フィールドに RMAN スクリプトの完全パスを入力します。以下を確認します。

- スクリプトは、エージェントのノードに存在し、RMAN を実行中のユーザ（通常は Oracle インスタンスの所有者）からアクセス可能である必要があります。
- ここで指定するスクリプトは、バックアップ マネージャにおいて選択されたすべてのオプションより優先されます。
- パス名がスラッシュ (/) で開始されていない場合、エージェントは自動的に \$CAORA_HOME/rman_scripts ディレクトリを参照してファイルを探します。

7. [デスティネーション]タブをクリックして、必要であればバックアップデスティネーションを選択します。
8. Click OK.ジョブがキューにサブミットされます。これで、ジョブステータスマネージャからジョブをモニタできるようになります。

バックアップのカスタマイズの詳細については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

RMANを使用した手動バックアップ

RMAN を使用して、手動でデータベースをバックアップすることができます。

リカバリカタログを指定して RMAN を起動し、データベースをバックアップする方法

1. コマンドライン ウィンドウを開き、以下のコマンドを入力して RMAN を起動します。

```
rman target dbuser/dbuserpassword rcvcat catowner/catownerpassword@rman service name
```

各エントリの内容は以下のとおりです。

dbuser - dba 権限を持つユーザ

dbuserpassword - dbuser のパスワード

catowner - RMAN カタログを所有する Oracle ユーザ名

catownerpassword - カタログ所有者のパスワード

rman database - RMAN カタログがインストールされているデータベース

2. データベースをバックアップするための RMAN スクリプトの作成：

libobk の Arcserve バージョンに対する Oracle リンクの再設定の使用

- データベースをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。

```
RMAN> connect target system/manager
RMAN> run {
2> allocate channel dev1 type 'sbt_tape';
3> backup database format '_%u_%p_%c';
4> release channel dev1;
5> }
```

これでバックアップが完了します。

RMAN スクリプトでの SBT_LIBRARY の使用

- 32 ビット Oracle データベースをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。

```
RMAN> connect target system/manager
RMAN> run {
2> allocate channel dev1 type sbt
parms='SBT_LIBRARY=/opt/Arcserve/ABoraagt/libobk32.so';
3> backup database format '_%u_%p_%c';
4> release channel dev1;
5> }
```

- 64 ビット Oracle データベースをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。

```
RMAN> connect target system/manager
RMAN> run {
2> allocate channel dev1 type sbt
parms='SBT_LIBRARY=/opt/Arcserve/ABoraagt/libobk64.so';
3> backup database format '_%u_%p_%c';
4> release channel dev1;
5> }
```

これでバックアップが完了します。

注: パス `/opt/CA/ABoraagt` は Agent for Oracle のデフォルトのインストールパスです。

RMAN コマンドライン スクリプト

ユーザが自分で RMAN スクリプトを書いて実行することができます。以下に、1 つのチャンネルで、1 つのテープ デバイスを使用して特定のデータ ファイルをバックアップする RMAN スクリプトの例を示します。

```
run {
allocate channel dev1 type 'sbt_tape';
backup (datafile '/oracle/oradata/demo/users01.dbf' format '_%u_%p_%c');
release channel dev1;
}
```

注: Agent for Oracle をバックエンドとして使用するには、以下を使用する必要があります。

- `sbt_tape` をチャンネルタイプとして使用します。
- `_%u_%p_%c` フォーマットを使用して、バックアップされるオブジェクトに確実に一意の名前が付けられるようにします。

以下に、バックアップ処理でマルチストリーミングを使用する RMAN スクリプトの例を示します。このスクリプトでは、2つのチャンネルを割り当てて、データを2基の異なるテープデバイスに同時にバックアップします。

```
run {
allocate channel dev1 type 'sbt_tape';
allocate channel dev2 type 'sbt_tape';
backup filesperset 1 format '_%u_%p_%c' (datafile '/oracle/oradata/demo/users01.dbf', '/oracle/oradata/demo/tools01.dbf');
release channel dev1;
release channel dev2;
}
```

RMAN および RMAN スクリプトの使用法の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

バックアップに関する制限事項

以下の表に、バックアップに関する制限事項を示します。

- カタログデータベース SID を複製したり、それをいかなる SID 名とも共有しないようにしてください。
- これは Oracle RMAN ではサポートされておらず、RMAN がバックアップするデータ量を事前に決定することはできません。

-
- マスタ ジョブ (バックアップ マネージャによってサブミットされたもの) では、**PARAMETER_FILES** (バックアップに含まれている場合) を除いて進捗を表示しません。サブ ジョブが進行中であっても、モニタリング ウィンドウにはマスタ ジョブの進捗状況は表示されません。しかし、マスタ ジョブが完了すると表示されます。サブ ジョブのモニタリング ウィンドウを開けると進捗が表示されますが、サブ ジョブの進捗を含んでいません。
 - バックアップ ジョブを **Oracle RMAN** コマンドラインからサブミットした場合、ジョブのスケジュールを変更することはできません。ジョブを右クリックしても、ジョブ キュー オプションの「レディ/ホールド/即実行/変更/再スケジュール」はグレー表示になります。

第 4 章：データのリストアおよびリカバリ

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[リストアおよびリカバリの基本](#) (P. 53)

[リストア](#) (P. 54)

[リストア マネージャ](#) (P. 55)

[データベースのリカバリ](#) (P. 72)

[リストアおよびリカバリに関する制限事項](#) (P. 77)

リストアおよびリカバリの基本

「リストア」とは、バックアップされたデータベースまたはオブジェクトから 1 つまたは複数のデータベース オブジェクトを、ロードすることです。リストアすると、データベース内の情報はバックアップの情報で上書きされます。データベースをリストアした後は、データベースをリカバリする必要があります。

「リカバリ」とは、リストアされたデータベースを更新し、エラーや破損が発生する前の状態に戻すことです。Oracle Server データベースでは、まずリストアを実行してから、リカバリを実行する必要があります。リストアとリカバリの両方が正常に完了すると、Oracle データベースが再び使用できるようになります。リカバリは、自動的に実行することも、手動で実行することもできます。

リストア

「リストア」とは、バックアップされたデータベースまたはオブジェクトから 1 つまたは複数のデータベース オブジェクトを、ロードすることです。リストアすると、データベース内の情報はバックアップの情報で上書きされます。データベースをリストアした後は、データベースをリカバリする必要があります。

「リカバリ」とは、リストアされたデータベースを更新し、エラーや破損が発生する前の状態に戻すことです。Oracle Server データベースでは、まずリストアを実行してから、リカバリを実行する必要があります。リストアとリカバリの両方が正常に完了すると、Oracle データベースが再び使用できるようになります。リカバリは、自動的に実行することも、手動で実行することもできます。

Arcserve Backup、Agent for Oracle、および Oracle RMAN を使用して、表領域、データ ファイル、アーカイブ ログ ファイル、パラメータ ファイルなどのデータベース オブジェクトを、個別に、またはグループにしてリストアできます。また、データベースのリストア時に制御ファイルをリストアできます。

リストア方式

Arcserve Backup およびエージェントを使用して、複数の種類のリストア処理を実行できます。

- バックアップ マネージャまたは RMAN コマンドラインを使用して、現在のリリースのエージェントによって作成されたバックアップからリストアします。
- (バックアップ マネージャのみを使用して) 古いリリースのエージェントによって作成されたオンラインバックアップからリストアします。
- (バックアップ マネージャのみを使用して) 古いリリースのエージェントによって作成されたオフラインバックアップからリストアします。
- (RMAN のみを使用して) 古いリリースのエージェントによって RMAN コマンドラインで作成されたバックアップからリストアします。

リストア マネージャ

リストア マネージャを使用して、さまざまなリストア ジョブを実行できます。バックアップ マネージャの詳細については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

リストア マネージャの [Oracle リストアの設定] タブには、以下のリストア オプションとリカバリ オプションが用意されています。

- Oracle DB ユーザ情報
- RMAN カタログを使用 (推奨)
- チャンネル数 (ストリーム)
- 最新バックアップからのリストア
- 次の日付のバックアップからリストア
- バックアップ タグからリストア

注: これらのリストア オプションの詳細については、この章の「リストア オプション」を参照してください。

■ 回復タイプ :

重要: これらのリカバリ方式のいずれかを使用すると、すべてのログは制御ファイルに最後に登録された日付にリセットされます。そのため、その日付以降にリカバリされたデータは失われ、復元できなくなります。

- SCN の終了まで (DB 全体のみ)
- ログ シーケンス番号の終了まで (DB 全体のみ)
- 終了時刻まで (DB 全体のみ)

注: ログはリセットされるため、最新状態のデータベース レコードを保存するには、フル オフラインバックアップを実行する必要があります。

- [リカバリなし] - このオプションを選択すると、データはリストアされますが、リカバリは実行されません。データベースのリカバリとオンラインに戻す作業を手動で行う必要があります。一般的に、リストアを回復できないとわかっている場合、このオプションを使用します。たとえば、追加のリストア ジョブが必要な場合や、リカバリ プロセスを開始する前に設定が必要な場合です。
- [ログの終わりまで回復] - RMAN によって、現在までのデータベース、表領域、およびデータ ファイルのリカバリが実行されます。
- [SCN まで回復 (DB 全体のみ)] - RMAN によって、[SCN 番号] に指定した値 (つまり、チェックポイント数) までのデータベースのリカバリが実行されます。このリカバリは、データベース全体の場合にのみ有効です。データベースは、**resetlogs** オプションを使用して開かれます。
- [ログ シーケンス番号の終了まで (DB 全体のみ)] - RMAN によって、[アーカイブされたログ シーケンス] に指定した値までデータベースのリカバリが実行されます。このリカバリは、データベース全体の場合にのみ有効です。データベースは、**resetlogs** オプションを使用して開かれます。
- [終了時刻まで (DB 全体のみ)] - RMAN によって、指定した時点までのデータベースのリカバリが実行されます。このリカバリは、データベース全体の場合にのみ有効です。データベースは、**resetlogs** オプションを使用して開かれます。
- [リカバリ後にリストア オブジェクトをオンラインに配置] - このオプションを選択すると、表領域とデータ ファイルがオンラインになり、回復完了後にデータベースがオープンされます。

さらに、[高度な Oracle オプション] タブには次のオプションがあります。

- [アーカイブ ログの選択]
 - [リストアしない] - このオプションを選択すると、アーカイブ済みログはリストアされません。
注: このオプションは自動的にオンになっています。
 - [時間] - このオプションでは、バックアップされた時間ではなく、作成された時間に基づいてアーカイブ済みログがリストアされます。このオプションを使用する場合、[開始] または [終了] フィールドにも値を入力する必要があります。
 - [スレッド] - このオプションでは、Oracle インスタンスの識別に使用するスレッド番号を指定します。排他モードの Oracle インスタンスのスレッドの場合、デフォルト値は 1 です。
 - [SCN] - このオプションでは、アーカイブされたログが、SCN (System Change Number) の範囲に基づいてリストアされます。
 - [ログ シーケンス] - このオプションでは、アーカイブ済みログのシーケンス番号によって、ログをリストアします。
- [制御ファイルを含める] - このオプションは、制御ファイルをリストアする場合に選択します。制御ファイルは、破損または損失した場合にのみリストアしてください。
重要: 制御ファイルをリストアすると、すべてのログがリセットされ、データベースの起動後に作成および更新された最新のデータが失われます。このデータを復元する方法はありません。
- [ブロック サイズ (Oracle 9i)] - このオプションを使用する場合、データブロックのサイズが、バックアップ時に使用されるブロック サイズと一致する必要があります。一致しない場合、リストアは失敗します。

-
- [選択したオブジェクトのバックアップセットリスト] - このオプションを選択すると、選択したオブジェクトを含むバックアップセットをすべて列挙するリクエストが送信されます。

注: このオプションでは、選択したオブジェクトはリストアされません。選択したオブジェクトをリストアするには、別のリストア ジョブをサブミットする必要があります。

- [バックアップセット番号を検証] - このオプションを選択すると、実際にリストアは実行せず、バックアップの整合性が **RMAN** で検証されます。
- [**RMAN** スクリプトのロード] - このオプションを使用して、**RMAN** スクリプトのパスを入力します。

重要: このオプションは、リストア マネージャで選択したすべてのオプションよりも優先されます。

リストア オプション

リストア マネージャの [ソース] タブで使用できるリストア オプションには、いくつかの種類があります。各オプションの詳細について、以降のセクションで説明します。

[チャンネル数(ストリーム)]オプション

[チャンネル数 (ストリーム)] オプションに数値を入力すると、エージェントから **RMAN** に対して使用するチャンネルの最大数が通知されます。次に、リストア操作へ実際に割り当てるチャンネル数が **RMAN** で決定されます。**RMAN** では、複数ジョブ (チャンネルごとに 1 ジョブずつ) が並行してサブミットされます。

注: 実際に使用する適切なチャンネル数は、**RMAN** で決定されるため、指定したチャンネル数よりも少なくなることがあります。

[最新バックアップからのリストア]オプション

[最新バックアップからのリストア] オプションを選択すると、最新のバックアップを使用するように、エージェントから **RMAN** へ指示されます。

注: [Oracle リストアの設定] タブの [回復タイプ] セクションのデフォルトの選択は [回復なし] です。リストア後にデータベースの回復を実行する場合には、ほかの [回復タイプ] の 1 つを必ず選択してください。

[以下のバックアップからのリストア]オプション

[以下のバックアップからのリストア] オプションを選択した場合、リストアしたいバックアップの時間の上限として、日付および時間を指定します。RMAN は、指定された時刻（その時刻を含まない）まで、ファイルの処理を実行します。このオプションは、以前のある状態（整合性レベル）に戻す必要があるデータベースがある場合に役に立ちます。

また、最新のバックアップにアクセスできない場合も、このオプションが使えます。この場合、[回復 (ログの終端まで)] オプションと併用して、古いバックアップセットからデータベースをリストアし、すべてのトランザクションを「再構築」して、データベースを最新の状態にします。

このオプションは、エージェントの以前のバージョンで利用可能だった [時間まで回復 (DB 全体のみ)] フィールドとは異なります。このオプションは、データベースをいつの時点までリカバリするかを指定するものではありません。単に、どのバックアップからデータをリストアするかを選択するだけです（終了時刻までリストア）。

注: [Oracle リストアの設定] タブの [回復タイプ] セクションのデフォルトの選択は [回復なし] です。リストア後にデータベースの回復を実行する場合には、ほかの [回復タイプ] の 1 つを必ず選択してください。

[バックアップタグからのリストア]オプション

[バックアップタグからのリストア] オプションを選択する場合、バックアップ時に使用したタグを指定して、リストアするバックアップセッションを示します。このタグは、特定のバックアップに割り当てられた論理名です（たとえば、「Monday Morning Backup」など）。

Note: [Oracle リストアの設定] タブの [回復タイプ] セクションのデフォルトの選択は [回復なし] です。リストア後にデータベースの回復を実行する場合には、ほかの [回復タイプ] の 1 つを必ず選択してください。

[ログの終端まで]オプション

[ログの終端まで] オプションと [リカバリ後リストア下オブジェクトをオンラインに配置] オプションの両方を選択すると、1回の操作で、データベースとデータベース オブジェクトのリストアとリカバリが自動的に実行されます。リストアおよびリカバリが完了すると、データベースが開きます。

重要: [ログの終端まで] オプションを選択した場合は、制御ファイルが損失または破損している場合を除き、制御ファイルをリストア対象にしないでください。制御ファイルをリストア対象にすると、Agent は、リストアされた制御ファイルを使用してデータベースのリカバリを実行します。その結果、リストアされたバックアップファイルに記録された最後のトランザクション以降に発生したデータベースでのトランザクションがすべて失われます。

リストアビュー

For any type of restore, you will use the default restore view on the Restore Manager. [ツリー単位のリストア] ビューには、Arcserve Backup を使用してバックアップしたホストのツリーが表示されます。リストアを実行するには、ホストを展開してデータベースおよびオブジェクトを表示してから、リストアするデータベースまたはファイルを選択します。表示されるデータベースは、最新のバックアップセッションのもので、

注: The Restore by Session and Restore by Backup Media views are not supported for Agent for Oracle session restores.メディア単位方式を選択した場合、このセッションはスキップされジョブは失敗します。具体的な原因を特定するには、Arcserve Backup アクティビティ ログを参照してください。

データベースオブジェクトのリストア

オフラインまたはオンラインでバックアップされた完全なデータベースのリストア方法

注: Before starting the Restore Manager, be sure to start Arcserve Backup.

1. リストア マネージャを開き、[ソース] タブを選択して、[ツリー単位] を選択します。
2. Linux エージェントを展開し、Linux エージェントの下の Oracle ホストを展開します。
3. リストアするデータベース、またはデータベース オブジェクトを選択します。
4. [デスティネーション] タブを選択し、Linux エージェントを展開します。
5. Linux エージェントの下の Oracle SID の左側にあるプラス (+) 記号をクリックします。

[ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

Oracle SID の左側にあるプラス (+) 記号をクリックせず、直接 Oracle SID をクリックした場合は、[Oracle オプション] タブで Oracle データベースのユーザ名とパスワードを入力する必要があります。この 2 つのフィールドは入力必須です。また、[RMAN カタログ] (推奨) オプションはデフォルトでオンになっているため、これがオンになっていない場合を除き、RMAN カタログの所有者名および所有者のパスワードを入力する必要があります。

ジョブの登録中、入力必須フィールドに未入力のものがある場合は、入力を要求するダイアログ ボックスが表示されます。入力しなければ、そのジョブは登録されません。

6. システムのユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。
7. リストアする Oracle データベースの左側にあるプラス記号をクリックします。

データベースのログイン用ダイアログ ボックスが表示されます。

-
8. Oracle dba のユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

Note: as sysdba 節を使用して Oracle データベースに接続する権限が割り当てられている Oracle のユーザ名とパスワードを使っているかどうかを確認してください。as sysdba 節を使用するかどうかに関係なく接続できる必要があります。

9. リストア オプションを設定するには、[ソース] タブを選択し、[Oracle オプション] タブをクリックしてください。

以下のリストア オプションを選択できます。

注: これらのオプションを組み合わせて選択することもできます。

- 多数のテープを使用している場合で、RMAN のリストアプロセス速度を向上させたい場合は、[チャンネル数(ストリーム数)] オプションを選択します。複数のチャンネルを選択すると、RMAN はこの値をリストア中に使用するチャンネルの最大数として承認します。
- 最新の利用可能なバックアップを使用してリストアしたい場合は、[最後のバックアップからのリストア] オプションを選択します。
- 特定の日時のバックアップをリストアしたい場合は、[以下のバックアップからのリストア] オプションを選択します。RMAN は、指定された時間（その時間を含まない）まで、ファイルの処理を実行することに注意してください。
- バックアッププロセス中に使用したタグの付いたバックアップをリストアしたい場合は、[バックアップタグからのリストア] オプションを選択します。
- [ログをパージ] オプションを使用した以前のバックアップの結果として、アーカイブ REDO ログが損傷したり削除されたりしている場合は、[高度な Oracle オプション] タブの [アーカイブログの選択] セクションからオプションを 1 つ（デフォルトの [リストアしない] 以外）選択します。これで、アーカイブ REDO ログが上書きされます。

注: アーカイブ REDO ログ ファイルが損失または破損している場合を除いて、通常は上書きしません。アーカイブ REDO ログを保持していると、システムやデータベースの障害が発生する直前の状態にデータベースを修復することができます。

- 制御ファイルをリストアしたい場合は、[高度な Oracle オプション] タブの [制御ファイルを含める] オプションを選択する必要があります。

注: 制御ファイルのリストアは必要な場合にだけ実行してください（損失や破損した場合など）。

リストア オプションに加え、リカバリ オプションも選択可能です。

- データをリストアした後でリカバリしたくない場合は、[回復なし] オプションを選択します。

注: このオプションは自動的にオンになっています。

- データベースをできるだけ現時点と同様にリカバリさせたい場合は、[ログの終端まで] オプションを選択します。
- リカバリが完了してすぐにデータベース オブジェクトを使用できるようにしたい場合は、[リストアされたオブジェクトを回復後にオンラインに設定] オプションを選択します。

注: For more information about other recovery types, see [Restore Manager](#) (P. 55).

10. Click Submit.

The Submit Job dialog opens.

11. ジョブをすぐに実行するか、または後で実行するかをスケジュールします。

[OK] をクリックしてジョブをサブミットします。

ジョブがサブミットされます。これで、ジョブ ステータス マネージャからジョブをモニタできるようになります。

ジョブが完了すると、データベース オブジェクトは Oracle サーバにリストアされます。Oracle データベースのリカバリの実行手順については、「[データベースのリカバリ](#) (P. 72)」を参照してください。リストア ジョブのサブミットの詳細については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

アーカイブ ログおよび制御ファイルのリストア

制御ファイルやアーカイブ ログ ファイルが損失または破損した場合は、リストアの設定時にリストア マネージャの [ソース] タブで対象となるファイルを選択することでリストアできます。

重要:バックアップ時に [バックアップ後にログをパージ] オプションを選択した場合、**RMAN** で必要なログのリストアが実行されるようにするには、[拡張 **Oracle** リストア オプション] タブの [アーカイブされたログ] オプションのいずれか ([リストアしない] 以外) を選択する必要があります。 [アーカイブされたログ] オプションを選択しないと、必要なログが見つからないためにリカバリ プロセスが適切に機能しないことがあります。ただし、**Oracle 9i** 以降を使用している場合、回復オプションのいずれかを選択すると、**RMAN** は必要なアーカイブ済みログを自動的にリストアします。

破損していないアーカイブ redo ログファイルは、通常、リストア対象にしないでください。アーカイブ REDO ログを保持していると、システムやデータベースの障害が発生する直前の状態にデータベースをリストアすることができます。

リストアの設定時に [回復 (ログの終端まで)] オプションを選択した場合は、制御ファイルが損失または破損している場合を除き、制御ファイルをリストア対象にしないでください。制御ファイルをリストア対象にすると、**Agent** は、リストアされた制御ファイルを使用してデータベースのリカバリを実行します。その結果、リストアされたバックアップ ファイルに記録された最後のトランザクション以降に発生したデータベースでのトランザクションがすべて失われます。

パラメータファイルのリストア

リストア マネージャを使用して、特定バージョンのパラメータ ファイルをリストアすることができます。

特定のバージョンのパラメータ ファイルをリストアするには、以下の手順に従います。

1. リストアするパラメータ ファイル (orapwfile など) を選択します。
2. [ソース] タブの上部にある [復旧ポイント] ボタンをクリックします。
3. 結果のダイアログで、リストアするパラメータ ファイルの正確なバージョンを選択します。

Click OK.

データベース オブジェクトのうち、特定バージョンをリストアできるのは、パラメータ ファイルのみです。この方法でパラメータ ファイルをリストアする場合、Arcserve Backup エージェントが直接使用され、RMAN は関与しません。

Note: [SQLNET.AUTHENTICATION_SERVICES] オプション ("none"に設定) が、バックアップおよびリストアの対象にする任意のインスタンスの init.ora ファイルに含まれる場合、orapwfile (PARAMETER-FILES に含まれます) をリストアする前に、このオプションをコメントアウトする必要があります。コメントアウトすることで、それ以降の sysdba データベース接続を防ぎ、通常の管理操作 (リカバリ、シャットダウン、起動など) を防ぐことができます。

Point-in-Time のリストア

データベースや表領域の Point-in-Time リストアを実行するには、データベースまたは表領域と、それらに関連付けられているアーカイブ ログ ファイルをリストアする手順に従います。具体的な手順については、このマニュアルの、リストアおよび回復に関する該当箇所を参照してください。

データベースや表領域の Point-in-Time リストアまたはリカバリの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

Note: The Until the End of Logs option, which automatically recovers a database after it has been restored, does not support point-in-time recoveries. Point-in-Time リカバリを実行する場合は、リカバリ手順を手動で実行する必要があります。

Recovery Manager (RMAN)、および別のサーバへのデータベースのリストア

RMAN を直接使用して別のサーバにデータベースをリストアする場合、以下の前提条件が必要です。

- ソース データベースまたはデスティネーション データベースではなく、別のデータベースに RMAN カタログをインストールする。
- バックアップとリストアの両方の処理で、RMAN でカタログを定義して使用する。
- Arcserve Backup サーバのストレージ デバイス上に RMAN カタログを使用する 1 つのフル データベース バックアップが存在する。
- 別のサーバに Oracle ソフトウェアがインストールされている。
- RMAN カタログ データベースの元のデータベースの DBID。
- 別のサーバに Arcserve Oracle エージェントがインストールされている。

例として、以下のシナリオを考えてみましょう。

- Arcserve Backup サーバ : arcbase
- 元のサーバ名 : Server-A
- 元のサーバ OS : Linux x64
- 元のサーバ情報
 - Oracle Agent home path = /opt/Arcserve/ABoraagt
 - ORACLE_SID = src
 - ORACLE_BASE = /opt/oracle
 - ORACLE_HOME = /opt/oracle/10gR2
 - ORACLE User = oracle
 - sys/system のパスワード = passw0rd
- RMAN カタログ データベース情報
 - RMAN の ORACLE_SID = catdb
 - RMAN ユーザ/パスワード = rman/rman
- 代替サーバ名 : Server-B

注: 以下の手順で使用するシナリオでは、<Server-A> からバックアップされたデータベースを <Server-B> にリストアし、データベース名を保持することを前提にしています。また、元のホストとデスティネーションホストのディレクトリ構造が同じであると仮定します。さらに、このシナリオでは Oracle 10gR2 を使用すると仮定します。

データベースを別のサーバにリストアするには、以下の手順に従います。

1. 別のサーバである Server-B の /etc/oratab を編集し、Oracle ユーザとして元のデータベース インスタンスに以下の行を追加します。

```
src:/opt/oracle/10gR2:N
```

2. Oracle netca (oracle net configuration assistance) ツールを実行して、RMAN カタログ データベース catdb の 1 つの TNS 名を設定し、Oracle ユーザとして Server-B にインストールしたデータベースからそれが認識できることを確認します。
3. Oracle ユーザとして元のサーバである Server-A と同じディレクトリ構造を作成します。

例 :

```
$cd $ORACLE_BASE/admin
$mkdir src
$mkdir adump bdump cdump dpdump pfile udump
$mkdir -p $ORACLE_BASE/oradata/src
$mkdir -p $ORACLE_BASE/flash_recovery_area/SRC
```

4. orasetup を実行して、別のサーバ (Server-B) 上で元のデータベースの Oracle エージェントを設定します。

```
#!/opt/Arcserve/ABoraagt/orasetup
```

orasetup で、データベース バックアップを処理するために Recovery Manager カタログを使用するかどうかをたずねられたら、「y」を指定します。

```
Are you planning on using a Recovery Manager catalog to handle database backups (Recommended)?(Y/N) Y
```

Oracle インスタンスの名前を指定するように求めるメッセージが表示されたら、元のインスタンス ID を指定します。

```
Oracle instance id to be used by this agent [<Enter> to end]: src
```

```
この Oracle インスタンス用の ORACLE_HOME 環境変数 : (default:/opt/oracle/10gR2) :
```

Recovery Manager サービス名を指定するように求めるメッセージが表示されたら、RMAN カタログ データベースの設定済みの TNS 名を指定します。

Since you have configured the Recovery Manager, please provide the Recovery Manager service name for database src.
Recovery Manager service name : catdb

- Server-B の `/opt/Arcserve/ABoraagt` フォルダ内の `sbt.cfg` ファイルを編集します。以下の「#」を削除し、Server-A のホスト名を入力します。

```
# Node where the original backup was made from
SBT_ORIGINAL_CLIENT_HOST=Server-A
```

- Arcserve Backup サーバから Server-B に、および反対方向にホスト名で ping を実行できることを確認します。
- 別のサーバ (Server-B) に 1 つの pfile を追加します。

- Server-A が利用可能な場合、pfile を取得できます。

sysdba ユーザとして元のデータベース インスタンス src に接続します。

```
$ sqlplus "/ as sysdba"
Generate pfile from spfile.
SQL> create pfile from spfile;
```

init<\$ORACLE_SID>.ora という名前のファイルが、パス \$ORACLE_HOME/dbs に作成されます。このファイルを、別のサーバ Server-B 上の同じパスにコピーします。

- Server-A が利用可能でない場合、データは利用できません。別の既存のデータベースから、リストアするデータベース用の pfile を 1 つ作成します。Server-B 上に利用可能なデータベースが存在しない場合、Oracle dbca ツールでデータベースを作成します。

既存のデータベース名が「tmpdb」とであると仮定します。

データベース「tmpdb」の spfile から pfile を作成します。

sysdba ユーザとして元のデータベース インスタンス「tmpdb」に接続します。

```
$ export ORACLE_SID=tmpdb
$ sqlplus "/ as sysdba"
Generate pfile from spfile.
SQL> create pfile from spfile;
```

「inittmpdb.ora」というファイルがパス ORACLE_HOME/dbs に作成されます。このファイルを「initsrc.ora」にコピーし、そのファイル内のすべての SID 名「temdb」を「src」に置き換えてファイルを保存します。

- 作成した pfile を使用して、「nomount」オプションを指定して src データベースを起動します。

```
$ export ORACLE_SID=src
$ sqlplus /nolog
SQL> conn sys/passw0rd as sysdba
```

```
SQL>startup nomount pfile=$ORACLE_HOME/dbs/init$ORACLE_SID.ora
SQL>exit
```

9. RMAN カタログを使用して spfile をリストアします。

```
$rman catalog rman/rman@catdb
RMAN> set dbid=<source database db_id value>
RMAN> connect target system/passw0rd;
RMAN>run {
2>allocate channel ch1 type sbt parms=SBT_LIBRARY=/opt/Arcserve/ABoraagt/libobk64.so;
3>restore spfile;
4>release channel ch1;
5>}
```

注: 32 ビット Oracle データベースの場合、SBT_LIBRARY は libobk32.so を使用します。64 ビット Oracle データベースの場合、SBT_LIBRARY は libobk64.so を使用します。

リストア ジョブが Arcserve Backup サーバ ジョブ キュー上で実行されます。ジョブが完了すると、spfile データベースが \$ORACLE_HOME/dbs パスにリストアされます。

データベースをシャットダウンします。

```
RMAN>shutdown immediate;
RMAN>exit
```

リストアした spfile を使用して、「nomount」オプションを指定してデータベースを起動します。

```
$sqlplus /nolog
SQL>conn sys/passw0rd as sysdba
SQL>startup nomount
SQL>quit
```

10. 制御ファイルをリストアします。

```
$rman catalog rman/rman@catdb
RMAN> set dbid=<source database db_id value>
RMAN> connect target system/passw0rd;
RMAN> run {
2> allocate channel dev1 type 'sbt_tape'
parms=SBT_LIBRARY=/opt/Arcserve/ABoraagt/libobk64.so;
3> restore controlfile;
4> release channel dev1;
5> }
```

代わりに、特定のバックアップ ピースから制御ファイルをリストアして Point-in-Time リストアを実行する場合、以下の手順に従います。

```
$ rman catalog rman/rman@catdb
RMAN> set dbid=<source database db_id value>
RMAN> connect target system/passw0rd;
RMAN> run {
2> allocate channel dev1 type 'sbt_tape'
```

```
parms='SBT_LIBRARY=/opt/Arcserve/ABoraagt/libobk64.so';
3> restore controlfile from 'Y';
4> release channel dev1;
5> }
```

‘Y’（バックアップ ピース情報）を取得するには、以下の手順に従います。

```
RMAN> set dbid=<dbid>;
RMAN> list backup of controlfile;
```

リストア ジョブが Arcserve Backup サーバ ジョブ キュー上で実行されます。ジョブが完了すると、データベース制御ファイルが \$ORACLE_HOME/oradata/\$ORACLE_SID パスにリストアされます。

11. 制御ファイルがリストアされたら、データベースをマウントします。

```
$sqlplus / as sysdba
SQL> alter database mount;
SQL> exit
```

12. データベースをリストアし、ログをアーカイブします。

```
$rman catalog rman/rman@catdb
RMAN> set dbid=<source database db_id value>
RMAN> connect target system/passw0rd;
RMAN> run {
2> allocate channel ch1 type sbt parms='SBT_LIBRARY=/opt/Arcserve/ABoraagt/libobk64.so';
3> restore database;
4> restore archivelog all;
5> release channel ch1;
6> }
```

リストア ジョブが Arcserve Backup サーバ ジョブ キュー上で実行されます。ジョブが完了すると、データベース ファイルおよびアーカイブ ログがリストアされます。

13. バックアップ制御ファイルを使用してデータベースを回復し、データベースを開きます。

```
$sqlplus / as sysdba
SQL> recover database using backup controlfile until cancel
```

14. `resetlogs` オプションを使用してデータベースを開きます。以下のコマンドを入力します。

```
SQL> alter database open resetlogs;
```

データベースのリカバリ

データベースまたはデータベース オブジェクトをサーバにリストアした後、それらをリカバリする必要があります。You can recover the database or database objects automatically using the Restore Manager or you can perform a manual recovery using the Oracle Server Manager Console. これ以降のセクションでは、これらの方法について説明します。

リストア マネージャによるリカバリ

リストア マネージャを使用すると、リストア ジョブの設定時に [回復 (ログの終端まで)] オプションを選択することで、データベースのリストアおよびリカバ리를 1 回の操作で自動的に実行できます。

- ログの終端まで
- SCN の終了まで (DB 全体のみ)
- ログ シーケンス番号の終了まで (DB 全体のみ)
- 終了時刻まで (DB 全体のみ)

データベース リカバリの実行

リストア マネージャを使用して、データベースまたはデータベース オブジェクトをリカバリするには、以下の手順に従います

1. Arcserve Backup を起動します。
2. リストア マネージャを開き、 [ツリー単位] を選択します。
3. [ソース] タブで、Linux エージェントを展開します。
4. Linux エージェントの下の Oracle ホストを展開します。
5. リストアおよびリカバリ対象のデータベースまたはデータベース オブジェクトを選択します。

Note: To perform a complete media recovery of the database, you must restore all required archive log files.

6. [デスティネーション] タブを選択し、Linux エージェントを展開します。

7. Linux エージェントの下の Oracle ホストの横のプラス (+) 記号をクリックします。

[ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

8. システムのユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

Oracle ホストが展開されます。

9. リストアする Oracle データベースの左側にあるプラス記号をクリックします。

データベースのログイン用ダイアログ ボックスが表示されます。

10. Oracle dba のユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

Note: as sysdba 節を使用して Oracle データベースに接続する権限が割り当てられている Oracle のユーザ名とパスワードを使っているかどうかを確認してください。as sysdba 節を使用するかどうかに関係なく接続できる必要があります。

11. [ソース] タブを選択し、[Oracle オプション] タブをクリックして、リカバリ オプションを 1 つ選択します。

12. ツールバーの [サブミット] をクリックします。

The Submit Job dialog opens.

13. ジョブをすぐに実行するか、または後で実行するかをスケジュールします。

Click OK.

ジョブがサブミットされます。これで、ジョブ ステータス マネージャからジョブをモニタできるようになります。

すべてのファイルがリストアされた後、エージェントによってファイルが自動的にリカバリされます。

エージェントでリカバリできないファイル

[回復タイプ]オプションの使用時に Agent for Oracle がリカバリできないファイルは、以下のとおりです。

- 損失または破損したオンライン REDO ファイル
- Agent によってバックアップされていない損失または破損したデータファイル
- Agent によってバックアップされていない損失または破損した制御ファイル
- Agent によってバックアップされていない損失または破損したアーカイブ ログ
- 非アーカイブ ログ モードで動作しているデータベースに属するファイル

リカバリ処理に関する Oracle の制限事項

データベースで実行できるリカバリ処理には、以下の Oracle データベースの制限事項が適用されます。

- データ ファイルおよび古い制御ファイルをリカバリするときは、データベース全体をリカバリする必要があります。データ ファイルレベルのリカバリは実行できません。
- フルデータベース リカバリを実行し、リストア操作前に一部の表領域がすでにオフラインの場合、自動的にリカバリは実行されません。オンラインに戻す前に、データ ファイルのリカバリを手動で実行する必要があります。
- Point-in-Time リカバリを実行したり、古い制御ファイルをリストアした後は、以前のバックアップからリストアされたデータ ファイルを redo ログによってリカバリできなくなります。そのため、resetlogs オプションを使用してデータベースを開く必要があります。また、できるだけ早急にフルバックアップを実行する必要もあります。

手動リカバリ

制御ファイルが損失または破損した場合は、手動でデータベースを完全にリカバリできます。このタイプのデータベース リカバリの詳細については、以下のセクションを参照してください。

損失または破損した制御ファイルを含むデータベース全体のリカバリ

制御ファイルが消失または破損した場合は、まず Oracle データベースをシャットダウンし、データベース全体をリカバリする前に、制御ファイルをリストアする必要があります。データベースをシャットダウンし、制御ファイルをリカバリしてから、データベース全体をリカバリするには、以下の手順に従います。

1. **SVRMGR** プロンプトまたは **SQL*Plus** プロンプトで以下のコマンドを入力して、データベースをシャットダウンします。

```
SHUTDOWN
```

2. 適切なプロンプトで、リカバリ対象となる Oracle データベースのインスタンスを起動して Oracle データベースをマウントしたら、リカバリを開始します。

- **SVRMGR** プロンプトで、以下のコマンドを入力します。

```
CONNECT INTERNAL;  
STARTUP MOUNT;  
RECOVER DATABASE USING BACKUP CONTROLFILE;
```

- **SQL*Plus** プロンプトで、以下のコマンドを入力します。

```
CONNECT SYSTEM/SYSTEM_PASSWORD AS SYSDBA;  
STARTUP MOUNT;  
RECOVER DATABASE USING BACKUP CONTROLFILE;
```

3. アーカイブ ログ ファイルの名前を入力するよう求められます。Oracle データベースによってアーカイブ ログ ファイルを自動的に適用することもできます。必要なアーカイブ ログ ファイルが見つからない場合は、オンライン REDO ログを手動で指定する必要がある場合があります。

オンライン REDO ログを手動で適用する際には、フルパスとファイル名を指定する必要があります。間違った REDO ログを指定してしまった場合は、以下のコマンドを再入力します。

```
RECOVER DATABASE USING BACKUP CONTROLFILE;
```

プロンプト上で正しいオンライン REDO ログ ファイルを指定します。すべての REDO ログが適用されるまで、上記の手順を繰り返します。

4. **SVRMGR** プロンプトまたは **SQL*Plus** プロンプトで以下のコマンドを入力して、データベースをオンラインに戻し、ログをリセットします。

```
ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;
```

5. アーカイブ REDO ログが保管されているディレクトリに移動し、すべてのログ ファイルを削除します。

-
6. オフラインの表領域がある場合は、**SVRMGR** プロンプトまたは **SQL*Plus** プロンプトで以下のコマンドを入力して、オフラインの表領域をオンラインに戻します。

```
ALTER TABLESPACE TABLESPACE_NAME ONLINE;
```

7. **RMAN** を使用して、バックアップされた制御ファイルによってデータベース全体をリカバリする場合は、**RMAN** でデータベース情報を再同期して、新規にリカバリされたデータベースを反映させます。データベース情報を再同期する方法

- a. **Oracle Database** ソフトウェアを所有するユーザアカウントに切り替えます。
- b. 以下のコマンドを入力して、**Oracle** データベースの **SID** を、リカバリされたデータベースの **SID** に設定します。

```
ORACLE_SID=database SID
```

- c. 以下のコマンドを入力して、処理を完了します。

```
rman target dbuser/dbuserpassword rcvcat catowner/catowner  
password@rman service name  
reset database
```

各エントリの内容は以下のとおりです。

- **dbuser** - リカバリされたデータベースに対する **dba** 権限を持つユーザ
- **dbuserpassword** - **dbuser** のパスワード
- **catowner** - **Oracle Recovery Manager** カタログ所有者の **Oracle** ユーザ名
- **rman service name** - **RMAN** カタログがインストールされているデータベースへのアクセスに使用するサービスの名前

オフラインフルバックアップからのリカバリ

オフラインモードでバックアップしたデータベースをリカバリしたい場合は、オンラインモードでデータベースをバックアップした場合と同様のプロセスを使用します。これは、オフラインバックアップはデータベースを休止状態にしますが、データベースはオンラインになっている（データベースへのアクセスやトランザクション処理はできませんが）ためです。

リストアおよびリカバリに関する制限事項

以下の表に、リストアおよびリカバリに関する制限事項を示します。

- オンライン REDO ログはバックアップされません。したがって、リストアすることはできません。
- リストア ジョブを開始する時点でリストア対象のデータベースにログインしているユーザがいる場合に、ロールバック セグメントを含むシステム表領域または表領域のいずれかをリストアしようとする、リストア ジョブは失敗します。この問題を回避するには、`/opt/Arcserve/ABcmagt/agent.cfg` ファイルで、`ORACLE_SHUTDOWN_TYPE` 変数を「`immediate`」に設定してください。
- カタログ データベースの SID は、ほかの SID 名と重複させたり、共用したりしないでください。
- Arcserve Backup では、暗号化された複数の Oracle RMAN セッションのリストアを単一のリストア ジョブに含めることはできません。暗号化された、複数の Oracle RMAN バックアップセッションは、それぞれ個別のリストア ジョブとしてリストアする必要があります。
- Arcserve Backup では、RMAN エージェントによる古い Oracle エージェントセッションのリストアはサポートしていません。
- リストア ジョブを Oracle RMAN コマンドラインからサブミットした場合、ジョブのスケジュールを変更することはできません。ジョブを右クリックしても、ジョブ キュー オプションの「レディ/ホールド/即実行/変更/再スケジュール」はグレー表示になります。

付録 A: ディレクトリおよびファイルの検索

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Agent Directory Locations](#) (P. 79)

[Agent File Locations](#) (P. 79)

Agent Directory Locations

The following directories are located under the home directory of the agent:

- **data** - 内部データ（リリース固有の情報）
- **lib** - ランタイム ライブラリ
- **logs** - ログ ファイル
- **nls** - メッセージファイル
- **rman_scripts** - エージェントによって自動的に生成されるスクリプト

Agent File Locations

以下のファイルは、エージェントのホーム ディレクトリにあります。

- **ca_backup** -- バックアップ ジョブをサブミットします。
- **ca_restore** -- リストア ジョブをサブミットします。
- **ckyor** -- セットアップの実行中にユーザ情報を読み取ります。
- **instance.cfg** -- セットアップ時にリストされるすべてのインスタンスを記述します。
- **libobk.so.2.32** -- Oracle とリンクするライブラリを記述します (SBT 2 | 32 ビット)。
- **libobk.so.2.64_AMD64** -- Oracle とリンクするライブラリを記述します (SBT 2 | 32 ビット)。
- **oraclebr** -- ブラウザを実行します。
- **oragentd** -- ジョブを実行するために、共通エージェントによってコールされます。

- **orasetup** -- それによってユーザがエージェントをセットアップできるスクリプトです。
- **sbt.cfg** -- セットアップの実行中に作成されるパラメータ ファイル。

データ ディレクトリの下のアгентファイル

RELVERSION ファイルには、このエージェントを構成要素とする Arcserve Backup のビルド番号が格納されており、データ ディレクトリの下に保存されます。

Agent Files Under Logs Directory

ログ ディレクトリ の下には、以下のログ ファイルが配置されます。

- **ca_backup.log** - 最後に実行した **ca_backup** コマンドの出力が記録されます。
- **ca_restore.log** - 最後に実行した **ca_restore** コマンドの出力が記録されます。
- **oragentd_<jobid>.log** - エージェントのアクティビティが記録されます。
- **oraclebr.log** - ブラウザのアクティビティが記録されます。

付録 B: トラブルシューティング

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[エイリアス名の割り当て \(P. 81\)](#)

[RMAN スクリプトによる複数のチャネルへのバックアップが失敗する \(P. 82\)](#)

[ヒント \(P. 82\)](#)

[メッセージ \(P. 83\)](#)

[RMAN Messages \(P. 88\)](#)

エイリアス名の割り当て

症状

エイリアス名を使用した **Linux Oracle Agent** ノードはかなり長くなります。

解決方法

エイリアス名を使用して **Linux Oracle Agent** ノードをバックアップすることもできます。たとえば、ノード名が長い場合、バックアップマネージャで別の名前を使用する場合、バックアップとリストアを行う前に以下の手順を実行します。

ホスト名を変更する方法

1. **Linux Oracle Agent** コンピュータ上の `sbt.cfg` ファイルで以下のように設定します。

```
SBT_SOURCE_NAME=エイリアス
```

```
SBT_ORIGINAL_CLIENT_HOST=エイリアス
```

各項目の説明

エイリアスは、Arcserve Backup マネージャで **Oracle Agent** ノードに指定する名前です。

`SBT_SOURCE_NAME` は、バックアップを実行するためにバックアップマネージャで **U/L Oracle** エージェント ノードに使用する名前です。

`SBT_ORIGINAL_CLIENT_HOST` はバックアップおよびリストアプロセスの中で使用するノード名です。

2. 変更を保存し、そのノード名で `caagent update` を実行します。

RMAN スクリプトによる複数のチャンネルへのバックアップが失敗する

症状

RMAN スクリプトによる複数のチャンネルへのバックアップが失敗します。

解決方法

マルチチャンネルバックアップを実行する間、データの受信側で他のチャンネルによってデータが長期間ブロックされているために、エージェントと Arcserve Backup サーバ間に接続タイムアウトが発生し、エラー E8522 が発生しています。

このエラーを回避するには、タイムアウト値（デフォルトでは 20 分）を増加する必要があります。タイムアウト値の設定方法の詳細については、アクティビティ ログでエラー E8522 をダブルクリックして詳細情報を取得してください。

ヒント

Agent for Oracle 用のヒントのリストを以下に示します。

- バックアップするデータベースが [Arcserve Backup ソース] タブのリストに表示されない場合は、*instance.cfg* ファイルを確認します。エージェントによって処理されるデータベース インスタンスごとに、*instance.cfg* ファイル内にエントリが存在する必要があります。このファイルは、エージェントのホーム ディレクトリにあります。
- データベースを参照できない場合は、Oracle Browser Log (*oraclebr.log*) でエラーが発生していないかどうか確認します。また、*agent/instance.cfg* ファイル内の ORACLE_SID および ORACLE_HOME に対応する値が正しく設定されていることを確認してください。
- ローカルエリア ネットワークに対する RMAN カタログ データベースは 1 つに限ることをお勧めします。
- RMAN を使用している場合は、エージェントが実行されているすべてのホストに、適切に設定された *tnsnames.ora* (Oracle Transparent Network Substrate 環境設定ファイル) が存在する必要があります。このファイルは、`$ORACLE_HOME/network/admin` ディレクトリにあります。

- リストア対象として選択するバックアップセッションは、バックアップジョブが正常に完了したものである必要があります。キャンセルまたは失敗したバックアップジョブのリストアは試行しないでください。
- ジョブが失敗した場合は、以下のログで失敗の原因を常に確認します。
 - oragentd_<job id>.log
 - Arcserve アクティビティ ログ
 - Oracle RMAN ログ (\$ORACLE_BASE/admin/SID/udump/sbtio.log)

メッセージ

このセクションでは、Linux プラットフォームで動作するエージェントに関する一般的なメッセージについて説明します。

バックアップまたはリストアが失敗する

Reason:

バックアップやリストアが失敗する場合は、さまざまな原因が考えられます。

Action:

エージェントのログ ファイルを確認してください。このファイルは、agent/logs ディレクトリにあります。バックアップ処理の詳細については、Oracle データベースのマニュアルを参照してください。

前回のバックアップジョブが異常終了した場合には、バックアップソースとして指定した表領域がバックアップモードになったままである可能性があります。表領域を通常モードにするには、SQL*Plus プロンプトで、以下のコマンドを入力します。

```
ALTER TABLESPACE "表領域名" END BACKUP
```

Oracle Server アイコンが表示されない

Reason:

エージェントがインストールされていないか、設定されていません。

Action:

エージェントをインストールします。エージェントのホーム ディレクトリに格納されている `instance.cfg` ファイルを確認してください。

Oracle - (209) ORA-01219E8606

Oracle - (209) ORA-01219: database not open: queries allowed on fixed tables/views only.

E8606 - データベースを表示できません。

Reason:

バックアップが試行された Oracle Server は、マウントされていますがオープンされていません。

Action:

Oracle Server をオープンします。

シャットダウン失敗 E9900

データベースを操作できません。

E9900 Oracle Agent:Oracle インスタンスのシャットダウンに失敗しました。

インスタンスをシャットダウンできません。

Reason:

バックアップ ジョブを実行しようとしても、エージェントがデータベースをシャットダウンできません。

Action:

Oracle データベースをシャットダウンして、バックアップ ジョブを再サブミットしてください。

Oracle DBAgent への接続に失敗する

ERROR:Fail to connect to Oracle DBAgent with Browsing mode: return [24].データベースを操作できません。

Reason:

オフラインの Oracle データベースに対してオンラインバックアップジョブを実行しようとした。

Action:

Oracle データベースを起動して(マウントして開いて)、バックアップジョブを再サブミットしてください。

!getOracleState()_Error_E9900

!get OracleState():olog()failed.Ida-rc=1033

原因:ORA-01033:ORACLE initialization or shutdown in progress.

DSA Connect Agent():Cannot determine state of instance hpdb.

ERROR:Fail to connect to Oracle DBAgent with Browsing mode:return[24].

E9900 Oracle: データベースは希望される操作を行うことができません。

Reason:

Oracle データベースを nomount または mount オプションを使用して起動した場合に、オンラインバックアップを実行しようとした。

Action:

バックアップジョブを実行するには、Oracle データベースを開いている必要があります。Oracle データベースを開き、バックアップジョブを再サブミットしてください。

ConnecttoServer_ORA-01017_Cannot Log on

ConnecttoServer(): olog() failed.lda-return-code=1017

Reason:ORA-01017: invalid username/password; logon denied

指定されたユーザ名/パスワードではログオンできません。

Reason:

誤ったパスワードでオンラインバックアップジョブをサブミットしています。

Action:

正しいユーザ名およびパスワードを使用して、ジョブを再サブミットしてください。

OBK-5607_OBK-5629_OBK-5621_RMAN-6088

OBK-5607 Error accessing internal tables

OBK-5629 Error while executing select thread #, seq # from V\$thread.OBK-504 SQL error ORA-01403 no data found.

OBK-5621 file not belong to target database anymore target database information is out of sync.

RMAN-6088 Data file copy not found or out of sync with catalog.

Reason:

Oracle データベース インスタンス名に「/」 (スラッシュ) が含まれています。

Action:

- 以下のコマンドを使用して、インスタンス名を確認してください。

```
select * from v$thread;
```

- インスタンスにデータベース名と異なる名前を付けるか、制御ファイルを作成し直してください。

svrmgr ユーティリティを使用している場合は、表領域を削除し、完全パス名を使用して表領域を作成し直してください。

ORA-12223_ORA-12500

ORA-12223:TNS: internal limit restriction exceeded.

ORA-12500 TNS: listener failed to start a dedicated server process

Reason:

同時に開いている TNS (Transparent Network Substrate) 接続が多すぎます。

Action:

バックアップ ジョブを複数のジョブに分割し、その各ジョブにいくつかの表領域が含まれるようにします。最初のジョブにはシステム表領域を含め、最後のバックアップ ジョブにはアーカイブ ログおよび制御ファイルを含める必要があります。

linux_user@hostname が確認されない

linux_user@hostname は認証サーバで確認されていません

原因:

Arcserve Backup ユーザと同等の権限が作成されなかったか、Red Hat 6.1 を実行している場合、/etc/hosts ファイルの情報構造が不正な可能性があります。

処置:

Arcserve Backup ユーザと同等の権限が適切に作成されているかどうか、および /etc/hosts ファイルに以下の情報構造が含まれているかどうかを確認します。

```
host_ip_address localhost.localdomain local_host host name
```

ホスト localhost_oraclebr:fatal:relocation の IP アドレス エラー

```
127.0.0.1 localhost.localdomain
```

IP address of host localhost.localdomain localhost hostname

oraclebr: fatal: relocation error: file <...>/libclntsh.so: symbol slpmprodstab: 参照された記号が見つかりません。

Reason:

これは、Oracle データベースのバグです。

Action:

Oracle からパッチを入手するか、または以下の手順に従います。

1. Oracle データベースのユーザとしてログインします。
2. データベースをシャットダウンします。
3. `$ORACLE_HOME/bin/genIntsh` スクリプトを編集します。
4. 以下の行をコメントアウトします。

```
ard $LIBCOMMON sorapt.o
```
5. `genIntsh` を実行して、共有ライブラリ (`libIntsh.so`) を作成し直します。
6. データベースを再起動します。

ORA-19565:BACKUP_TAPE_IO_SLAVES not enabled

ORA-19565:BACKUP_TAPE_IO_SLAVES not enabled when duplexing to sequential devices

Reason:

バックアップの 2 つ以上のコピーを生成しようとしています。

Action:

バックアップの 2 つ以上のコピーを生成する場合は、`init<sid>.ora` または SPFILE ファイルの `BACKUP_TAPE_IO_SLAVES` オプションを有効にします。

RMAN Messages

このセクションでは、Recovery Manager (RMAN) の一般的なメッセージについて説明します。

Note:For more information about RMAN messages, see the Oracle documentation.

コマンドの割り当てエラー

コマンドの割り当てエラー

```

RMAN-00571:=====
RMAN-00569 : ===== エラー メッセージ本文 =====
RMAN-00571:=====

RMAN-03007: retryable error occurred during execution of command: allocate
RMAN-07004: unhandled exception during command execution on channel dev1
RMAN-10035: exception raised in RPC:ORA-19554: error allocating device, device type:SBT_TAPE, device name:
ORA-19557: device error, device type:SBT_TAPE, device name:
ORA-27000: skgfsbi: failed to initialize storage subsystem (SBT) layer
Additional information:4110
ORA-19511 : SBT error = 4110, ermo = 0, BACKUP_DIR environment variable is not set
RMAN-10031 : ORA-19624 occurred during call to DBMS_BACKUP_RESTORE.DEVICEALLOCATE

```

Reason:

Oracle データベースと libobk ライブラリのリンクが存在しないか、リンクに障害があります。

Action:

以下のコマンドを入力して、Oracle をユーザの libobk ライブラリに再リンクするか、ソフトリンクを作成します。

```
In-s $CAORA_HOME/libobk.so.2.32 $ORACLE_HOME/lib/libobk.so
```

ARCHIVELOG モードで実行できない

症状

データベースを展開しようとしても展開せず、oraclebr.log ファイルに、データベースが ARCHIVELOG モードで実行されていないと表示されます。どうすればよいでしょうか。

解決方法

「Agent for Oracle ユーザガイド」の説明に従って、データベースが ARCHIVELOG で実行されるように設定してください。

RMAN がバックアップまたはリストア中にエラーを発生して終了する

症状

RMAN を使用してバックアップまたはリストアを実行しようとする時、エラーが発生して RMAN が終了します。どうしたらよいのでしょうか。

解決方法

手動で RMAN ジョブを実行している場合は、以下の手順に従います。

注: If you used Restore Manager to start RMAN, these steps are performed automatically for you.

RMAN を実行するユーザに対して、Arcserve Backup を使用して caroot と同等の権限を作成していることを確認します。

エージェントエラーが発生して RMAN ジョブが終了する

症状

RMAN ジョブが終了し、エージェントが起動しなかったというエラーメッセージが表示されました。どうすればよいのでしょうか。

解決方法

テープが使用できない場合など、ジョブキューでジョブがアクティブでない状態が続き、sbt.cfg の SBT_TIMEOUT パラメータで指定された時間を超えると、RMAN はタイムアウトになります。ご使用の環境に合わせて、SBT_TIMEOUT の値を大きくしてください。

[回復(ログの終端まで)]オプションが機能しない

症状

[回復 (ログの終端まで)] オプションがなぜか機能しません。このオプションを有効にするには、どうすればよいのでしょうか。

解決方法

必要なアーカイブログがすべてリストアされていることを確認してください。それでも使用できない場合は、リストアされたファイルの手動リカバリを実行してください。

バックアップまたはリストアが失敗する

症状

Arcserve Backup からバックアップ ジョブまたはリストア ジョブをサブミットすると、ジョブが失敗し、**oragentd** のログが生成されません。ジョブを実行するには、どうすればよいでしょうか。

解決方法

エージェントが起動していない可能性があります。Universal Agent ログ (**caagentd.log**) でエラーを確認します。このログでエラーが認められない場合は、**agent.cfg** ファイルの **LD_LIBRARY_PATH**、**SHLIB_PATH**、**LIBPATH** の各エントリで適切なディレクトリが指定されていることを確認します。問題がないと思われる場合は、ほかの Arcserve Backup ログでエラーを確認してください。

oragentd_<job id> ログ ファイルの数が多すぎる

症状

ログ ディレクトリに保管されている **oragentd_<job id>.log** ファイルの数が多すぎます。このディレクトリをクリーンアップするには、どうすればよいでしょうか。

解決方法

バックアップ処理またはリストア処理が完了すると、**oragentd** プロセスにより、Universal Agent の **agent.cfg** ファイルの **DAYS_ORAGENTD_LOGS_RETAINED** パラメータの値が確認され、指定の保存日数を経過したログ ファイルが削除されます。より頻繁にクリーンアップするには、ログ ファイルの保存日数を変更し、**caagent update** コマンドを (**root** ユーザとして) 実行してください。デフォルト値は 30 日です。

リストア中に Oracle データベースの権限エラーが発生する

症状

[回復 (ログの終端まで)] オプションを有効にして、リストア処理を実行しようとする、Oracle データベースの権限エラーが発生します。これを防ぐには、どうすればよいでしょうか。

解決方法

リストア マネージャを通じて Oracle データベースに接続する際に使用する Oracle のユーザ名とパスワードに、`as sysdba` 節を使用して Oracle データベースに接続する権限が割り当てられているかどうかを確認してください。`as sysdba` 節を使用するかどうかに関係なく接続できる必要があります。

権限を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
sqlplus /nolog  
  
connect username/password as sysdba
```

権限が割り当てられていない場合は、Oracle データベース管理者に依頼して、専用のセキュリティを設定してもらってください。

別のディレクトリでの Oracle データファイルのリストア

症状

Arcserve Backup の GUI によるリストア操作を使用して、Oracle データファイルを別のディレクトリにリストアするには、どうすればよいでしょうか。

解決方法

これは不可能です。データベースを別のノードにリストアすることはできませんが、データベースがリストアされるディレクトリ構造全体が、ソースノードのディレクトリ構造に一致する必要があります。

「ジョブ内に Oracle パスワードがありません」というメッセージが表示されて、エージェントが失敗する

症状

I am trying to run a backup or restore job, and the agent fails with the error "Oracle password is missing in the job." How can I fix this?

解決方法

[Oracle オプション] タブの適切なフィールドにパスワードが入力されていることを確認してください。

同じデータベースのバックアップを同時に実行しようとする、エラーメッセージが表示される

症状

同じデータベースのオンラインバックアップを同時に直接実行しようすると、エラーメッセージが表示されます。これは問題でしょうか。

解決方法

はい。通常、このようなエラーが発生します。同じ Oracle データベース オブジェクトを同時に処理する並列処理はサポートされていません。

症状

リストア処理が低速です。処理速度を向上させるには、どうすればよいでしょうか。

解決方法

子プロセスと `oragentd` 親プロセスの間で割り当てられる共有メモリでは、マルチバッファリング キューを使用して、リストア処理で転送されるデータをできるだけ多く並列化しようとしています。デフォルト値は、**80** ブロックです。ブロック数を増やして、リストア処理の速度を向上させるには、`Universal Agent` のディレクトリに保管されている `agent.cfg` ファイルを編集します。`CA_ENV_NUM_OF_REST_BUFF` に新しい値を割り当て、この値をコメント解除し、`caagent update` コマンドでアクティブにします。

ブロック数を増やしてもあまり効果がない場合は、代わりにブロック数を減らしてみてください。状況またはプラットフォーム (OSF など) によっては、ブロック数を減らすことでパフォーマンスが向上します。各状況に応じて、異なる値を試してみる必要があります。

付録 C: agent.cfg および sbt.cfg ファイルの設定

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[agent.cfg 環境設定ファイル \(P. 95\)](#)

[sbt.cfg パラメータ ファイル \(P. 98\)](#)

[NLS_LANG パラメータを設定する \(P. 104\)](#)

agent.cfg 環境設定ファイル

エージェント環境設定ファイル `agent.cfg` は、**Universal Agent** のホーム ディレクトリにあります。このファイルには、システムにインストールされた各サブエージェント（バックアップ エージェントおよびクライアント エージェント）に対して `orasetup` が実行されるときに使用されるデフォルトの情報が記載されています。また、**Oracle Agent** のホーム ディレクトリ、**Oracle Recovery Manager** のユーザ名とパスワード、および `NLS_LANG` と `NLS_DATE_FORMAT` の情報も含まれています。

注:

`agent.cfg` ファイルを変更した後、`caagent update` コマンドを使用して Agent をリロードする必要があります。

以下に、*agent.cfg* ファイルの内容の例を示します。

```
[46]
# Oracle Agent
NAME Oracle Agent
VERSION 17.0
HOME <Oracle Agent home directory>
ENV CAS_ENV_ORACLE_AGENT_HOME=<Oracle Agent home directory>
#ENV CA_ENV_NUM_OF_REST_BUFF=
ENV DAYS_ORAGENTD_LOGS_RETAINED=30
ENV ORACLE_SHUTDOWN_TYPE=immediate
#ENV NLS_LANG=american
ENV NLS_DATE_FORMAT=MM/DD/YYYY/HH24:MI:SS
ENV LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib:<Oracle Agent home directory>:<Oracle Agent home
directory>/lib/opt/Arcserve/ABcmagt:/usr/local/CAlib:$LD_LIBRARY_PATH
BROWSER oraclebr
AGENT oragentd
```

`CA_ENV_NUM_OF_REST_BUFF` パラメータでは、リストア処理のパフォーマンスを変更できます。最適な値が、環境およびホストの負荷によって異なる場合がありますので、このパラメータを変更するときは注意が必要です。

エージェントログが保存されてから自動的に削除されるまでの日数を変更する場合は、変数 `DAYS_ORAGENTD_LOGS_RETAINED` を更新します。ログファイルが自動的に削除されないようにする場合は、「0」と入力します。

agent.cfg ファイルに記載されている **Recovery Manager** のホームディレクトリの設定は、手動で変更しないでください。この設定を変更する場合は、`orasetup` プログラムを再実行し、新しい情報を入力して再登録します。

この環境設定ファイルを使用して、Oracle データベースのオフライン操作が必要なときに実行する Oracle データベースのシャットダウンの種類を選択することもできます。サポートされている値は、「normal」、「immediate」、「abort」の3種類です。Arcserve カスタマサポート担当者からの指示がない限り、*agent.cfg* ファイルのデバッグオプションを手動で有効にしないでください。

詳細情報:

[NLS_LANG パラメータを設定する \(P. 104\)](#)

デバッグ オプションの有効化

以下の手順でデバッグ オプションを有効にすることができます。

デバッグ オプションを有効にする方法

1. agent.cfg ファイル (/opt/Arcserve/ABcmagt ディレクトリ内) をエディタで開き、以下の行を追加します。

```
ENV CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4
```

```
ENV SBT_DEBUG=1
```

2. *caagent update* コマンドを使用して、エージェントを再ロードします。

注: 必要でない限り、このデバッグ オプションは有効にしないでください。

前のバックアップの復旧情報の複製先へのリストア

前のバージョンを使用してバックアップした、データ ファイル、パラメータ ファイル、制御ファイル、アーカイブ ログなどのデータベース オブジェクトを、復旧情報の複製先にリストアできます。

この機能を使用するには、以下のパラメータを agent.cfg ファイルに追加します。

```
ORA_RESTORE_DEST_DIR
```

例 :

```
ENV ORA_RESTORE_DEST_DIR=/home/oracle/mydirectory
```

注: To restore the database objects to it's original location, you must remove or comment out the ORA_RESTORE_DEST_DIR parameter in the agent.cfg file.

sbt.cfg パラメータファイル

作成後の初期 `sbt.cfg` ファイルは、エージェントのホームディレクトリに配置されます。このファイルには、以下のパラメータが含まれます。

- **SBT_HOST <host name>** - 目的の Arcserve Backup サーバが動作するホストの名前です。
- **SBT_DATA_MOVER** - Data Mover の値により、すべてのバックアップデータがローカルの Data Mover に移動します。

Note: Ensure you run the `orassetup` script to reconfigure this parameter, instead of changing the value manually.

- **SBT_SOURCE_NAME** - Arcserve Backup サーバに登録されるエージェントノード名を設定します。

Note: If the node name registered in Arcserve Backup server is same as the agent node hostname, do not set this parameter.

- **SBT_ORIGINAL_CLIENT_HOST <host name>** - 1つのホストから別のホストにデータをリストアする際に、元のクライアントホストの名前を指定します。
- **SBT_USERNAME <user name>** - Agent for Oracle が動作するホストに接続できる Linux ユーザの名前です。
- **SBT_PASSWORD <password>** - エージェントが動作するホストに接続できる Linux ユーザのパスワードです。この値は `cas_encr` プログラムを使用して暗号化されます。
- **SBT_TIMEOUT <number of minutes>** - エージェントが起動してからタイムアウトになるまで Oracle Recovery Manager が待機する時間（分）です。
- **SBT_DESTGROUP <device group name>** - バックアップ処理で使用する Arcserve Backup デスティネーションデバイスグループの名前です。指定されない場合は、使用可能な任意のデバイスグループが使用されます。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPE <tape name>** - バックアップ処理で使用する Arcserve Backup デスティネーションメディアの名前です。指定されない場合は、使用可能な任意のメディアが使用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPPOOL <media pool name>** - バックアップ処理で使用する Arcserve Backup デスティネーションメディア プールの名前です。デフォルトでは「none」が指定され、メディア プールは使用されません。
Note: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_LOGFILE <log file path>** - バックアップ ジョブのアクティビティを、指定されたファイル名に記録します。
- **SBT_LOGDETAIL <summary | all>** - SBT_LOGFILE パラメータで指定されたファイルに、ジョブ サマリを記録するか、ジョブのすべてのアクティビティを記録するかを指定します。
- **SBT_SNMP <true | false>** - Arcserve Backup ロガーの SNMP Alert オプションを使用するかどうかを指定します。デフォルト値は「false」です。
- **SBT_TNG <true | false>** - CA Unicenter の Alert オプションを使用するかどうかを指定します。デフォルト値は「false」です。
- **SBT_EMAIL <email address>** - 指定された電子メールアドレスに、アクティビティ ログのコピーを送信します。デフォルトでは指定されません。
- **SBT_PRINTER <printer name>** - 指定されたプリンタに、アクティビティ ログのコピーを送信します。プリンタは、
\$BAB_HOME/config/caloggerd.cfg 環境設定ファイルで設定されている必要があります。デフォルトでは、プリンタは指定されません。

- **SBT_EJECT <true | false>** - バックアップ処理の終了時にテープをイジェクトするかどうかを指定します。デフォルト値は「false」です。
- **SBT_TAPEMETHOD <append | owritesameblank | owritesameblankany | owritesameanyblank>** - ジョブでメディアを取り扱う方法を指定します。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **append** - メディアの最後にセッションを追加します。この値がデフォルトです。
- **owritesameblank** - SBT_DESTTAPE パラメータで指定されたメディアの使用を試行します。使用できない場合は、ブランクメディアの使用を試行します。
- **owritesameblankany** - SBT_DESTTAPE パラメータで指定されたメディアの使用を試行します。使用できない場合は、ブランクメディアの使用を試行します。ブランクメディアが使用できない場合は、任意のテープを使用します。
- **owritesameanyblank** - SBT_DESTTAPE パラメータで指定されたメディアの使用を試行します。使用できない場合は、ほかのテープの使用を試行します。テープが使用できない場合は、ブランクメディアの使用を試行します。

注: This parameter requires the SBT_DESTTAPE or SBT_DESTTAPESUN...SBT_DESTTAPESAT parameters to be set. このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_SPANTAPEMETHOD <owritesameblank | owritesameblankany | owritesameanyblank>** - ジョブでテープスパンの際にメディアを取り扱う方法を指定します。
- **owritesameblank** - SBT_DESTTAPE パラメータで指定されたメディアの使用を試行します。使用できない場合は、ブランクメディアの使用を試行します。この値がデフォルトです。
 - **owritesameblankany** - SBT_DESTTAPE パラメータで指定されたメディアの使用を試行します。使用できない場合は、ブランクメディアの使用を試行します。ブランクメディアが使用できない場合は、任意のテープを使用します。
 - **owritesameanyblank** - SBT_DESTTAPE パラメータで指定されたメディアの使用を試行します。使用できない場合は、ほかのテープの使用を試行します。テープが使用できない場合は、ブランクメディアの使用を試行します。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_TAPETIMEOUT <number of minutes>** - ジョブがタイムアウトになるまでにメディアをマウントできる時間 (分) です。デフォルト値は 5 分です。
- **SBT_SPANTAPETIMEOUT <number of minutes>** - テープ スパンの際に、ジョブがタイムアウトになるまでにメディアをマウントできる時間 (分) です。デフォルト値は無制限です。
- **SBT_DAYOFWEEK <true | false>** - SBT_DESTTAPESUN ... SBT_DESTTAPESAT および SBT_MEDIAPOLSUN ... SBT_MEDIAPOLSAT の値として定義されたデスティネーションテープまたはメディアプールを、SBT_DESTTAPE および SBT_MEDIAPOL で指定されたデフォルト値の代わりに使用するかどうかを指定します。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPESUN <tape name>** - ジョブの実行日が日曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPEMON <tape name>** - ジョブの実行日が月曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPETUE <tape name>** - ジョブの実行日が火曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPEWED <tape name>** - ジョブの実行日が水曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPETHU <tape name>** - ジョブの実行日が木曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。

注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_DESTTAPEFRI <tape name>** - ジョブの実行日が金曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_DESTTAPESAT <tape name>** - ジョブの実行日が土曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアの名前です。未指定の場合は、SBT_DESTTAPE 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPOOLSUN <media pool name>** - ジョブの実行日が日曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPoolMON <media pool name>** - ジョブの実行日が月曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPoolTUE <media pool name>** - ジョブの実行日が火曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPoolWED <media pool name>** - ジョブの実行日が水曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPoolTHU <media pool name>** - ジョブの実行日が木曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_MEDIAPoolFRI <media pool name>** - ジョブの実行日が金曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。

- **SBT_MEDIAPOOLSAT <media pool name>** - ジョブの実行日が土曜日で、SBT_DAYOFWEEK パラメータが TRUE の場合に使用するメディアプールの名前です。未指定の場合は、SBT_MEDIAPool 値が適用されます。
注: このパラメータはバックアップ専用です。
- **SBT_NB_BLOCKS <number of memory blocks>** - SBT インターフェースが、エージェントとデータを交換する際に使用する共有メモリのブロック数です。これは、調整用のパラメータです。通常は変更しないでください。デフォルト値は、50 ブロックです。
- **SBT_APPEND_BACKUP_CMDLINE <command line arguments>** - バックアップジョブをサブミットする際に、SBT インターフェースによって生成される `ca_backup` コマンドラインに追加する引数および値です。これは、SBT インターフェースでサポートされていないパラメータを指定する一般的な方法です。
- **SBT_APPEND_RESTORE_CMDLINE <command line arguments>** - リストアジョブをサブミットする際に、SBT インターフェースによって生成される `ca_restore` コマンドラインに追加する引数および値です。これは、SBT インターフェースでサポートされていないパラメータを指定する一般的な方法です。

注: You can also define a parameter as an environment variable and as a parameter set by the send command in a RMAN script (for Oracle 9i, and 10g).RMAN スクリプトでパラメータを設定するには、以下のように入力します。

```
run {
  allocate channel dev1 type 'sbt_tape';
  send "SBT_HOST=myhost";
  send "SBT_USERNAME=oracle";
  send "SBT_PASSWORD=nobodyknows";
  ...
}
```

RMAN で `send` コマンドを使用して設定した値は、`sbt.cfg` ファイルで指定された値または同等の環境変数よりも優先されます。環境変数として設定した値は、`sbt.cfg` ファイルで指定された同等の値よりも優先されます。

NLS_LANG パラメータを設定する

Arcserve Backup Agent for Oracle が Oracle データベースから JPN データファイル名を取得するために SQL*Plus を呼び出す場合、「???.dbf」という文字化けが発生し、Arcserve データベースによる表領域名の分類が失敗する場合があります。エージェントによる分類の失敗は、クライアントの文字セットが Oracle データベースの文字セットを特定できない場合に発生します。

この問題を回避するには、バックアップまたはリストアを実行する前に NLS_LANG 変数を設定します。これは、エージェントの agent.cfg ファイルでは NLS_LANG はコメントアウトされているためです。NLS_LANG パラメータをコメント解除して値を設定してから、Common Agent を再起動して、以下の例に従ってバックアップおよびリストアを実行します。

例 1

orasetup スクリプトを実行してエージェントを設定すると、以下の行が agent.cfg ファイルに表示されます。

```
#ENV NLS_LANG=American
```

このパラメータを有効にするには、「=」の後の内容を変更することによりコメント解除します。そして必要な値を設定し、caagent update を実行して内容を Common Agent に同期させます。

例 2

日本語環境で、Oracle の NLS_LANG パラメータを設定する方法

1. SQL*Plus を使用して、Oracle サーバの文字設定を選択し、サーバ文字が AL32UTF8 を使用していることを確認します。
2. 以下の設定をエージェントの Agent.cfg ファイルに追加します。

```
NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8
```

3. caagent update を実行して、設定を更新します。

パラメータが設定されます。

詳細情報:

[agent.cfg 環境設定ファイル \(P. 95\)](#)

第 5 章：用語集

Oracle RAC

Oracle RAC (Real Application Cluster) は、Oracle データベース環境にクラスター化と高可用性保護を提供するアプリケーションです。Oracle RAC の使用法の詳細については、Oracle の Web サイトを参照してください。

REDO ログ

REDO ログは、Oracle データベースに対する変更が記録されるファイルです。

インデックス

インデックスは、データベースからデータを取得できるようにするデータベース コンポーネントです。

スキーマ オブジェクト

データベース スキーマは、データベースの構造を定義します。

データファイル

データファイルは、データベースの物理構造を記述するオペレーティングシステム ファイルです。

制御ファイル

制御ファイルは、データベース内部の物理構造のステータスが記録されるファイルです。

表領域

表領域は、データベース管理オブジェクトが保存されるデータベース コンポーネントです。

用語集エントリ

Oracle RMAN (Oracle Recovery Manager) は、Oracle データベースのバックアップ、リストア、および障害回復を行う Oracle アプリケーションです。Oracle RMAN の使用法の詳細については、Oracle の Web サイトを参照してください。

第 6 章：インデックス
